

Network 経済

2018

Vol.33・34

インタビュー

経済学部生の辿った道
～これまで、今、そしてこれから



獨協大学経済学部

インタビュー

経済学部生の辿った道 ～これまで、今、そしてこれから

- 03 巻頭言 経営学科長 鈴木 淳
- 04 インタビュー 経済学部生の辿った道～これまで、今、そしてこれから
- 16 第5回プレゼンテーション・コンテスト開催報告
- 26 ゼミ活動報告
- 42 学生活動報告
- 44 新任教員挨拶
- 51 新任職員挨拶
- 51 編集後記

巻頭言

経済学部は1964年の獨協大学開学時に経済学科一学科で開設され、1966年に経営学科が新設されました。長年、経済と経営の2学科体制で運営されてきましたが、2013年には国際環境経済学科が新設され、現在に至ります。2017年春には、国際環境経済学科が全学で最も高い就職率の学科として最初の卒業生を輩出し、実態としても3学科体制が確立したとも言えるでしょう。このように、社会の変化に対応できるよう学部の教育と研究の内容を改革し続けて来ました。

今後も、社会の変化に伴い、大きなカリキュラム改編は十年程度の間隔で必要となるでしょう。しかし、入学年度によって制度が変わり、履修科目が大きく違ったり、必要な単位数が変わったりすると、学生側にとっても混乱が生じかねませんし、教職員にとっても煩雑さが増すことがあります。改革は必要としても、必要以上に複雑化するのとは本末転倒でもあります。

経済学部は授業科目の入れ替えなど細かな調整も何年かおきに行っています。最近では、古い科目を廃止し「行動経済学」や「公会計」などの新規科目を設置しました。現在は、教職の再課程認定を想定して2019年度からのカリキュラム改編を検討中ですが、小規模な科目の変更はあるとしても、現在の3学科体制は維持し、学科共通科目として経済学・経営学・数学・統計学の入門的な科目を経済学部のどの学科の学生も学ぶことや、2年次以降の演習、いわゆる「ゼミナール」を学科の垣根を超えて履修を認めることは続ける構想で進めています。

これからの社会では、人口減少による少子高齢化や人工知能とロボットによる仕事の置き換えなどによって、従来の規範を守るだけでは対応できないことが多々起こると予想されます。その時、用意された正解を当てるような問題ばかりではなく、新しく出現した正解が分からない問題を発見し解決していく能力が必要になります。言い換えれば、マニュアル通りにすれば良い仕事は機械に置き換えられ、人間は臨機応変に考えて行動しなければならない仕事を担当するようになっていくことでしょう。その時に備えてどんなことを学んでおけば良いのでしょうか。

学生の本分は学びであります。通常の授業時間に教室で講義を受けることだけが学びではありません。ゼミナールや学生の自主的なグループで、何事かに取り組み、成果を生み出そうとがき、ある時は成功をつかんで自信を深め、ある時は失敗に直面し反省から何かを得ることも、また学習であると考えます。経済学部としても、プレゼンテーション・コンテスト、ポスターセッションなどを主催してその機会を提供しています。また各教員が担当するゼミナールでも、校外合宿や企業訪問、他大学との合同ゼミナールなどを実施して、教室の外での活動も学びの場として機能していることでしょう。これらの活動の一部には、学生生活支援制度から補助もされています。今後とも、経済学部へご支援いただきたくよろしくお願い申し上げます。



経営学科長 鈴木 淳

経済学部生の辿った道

～これまで、今、そしてこれから

経済学部経営学科教授 有吉 秀樹

本学の初代学長である天野貞祐先生は、「大学は学問を通じての人間形成の場である」という理念を掲げました。建学から50年が過ぎた今、この理念のもと経済学部を巣立っていったかつての学生たちは当時何を考え、どう生きていたのでしょうか？また、現在学び舎に集う学生たちは何を思い、どう動いているのでしょうか？8名の学生インタビューが卒業生・現役生の等身大に迫りました。インタビューは2年生に始まり、最後は天野先生のお孫さんである安川ひろし様で締めくくられます。天野先生のお言葉のとおり、経済学部での日々が彼らの今を形作っていることをじっくりと味わっていただきたいです。

インタビュー

	経済学科2年	徳永ゼミ	安孫子 瑛基
	経済学科3年	塩田ゼミ	春山 文宏
	経済学科4年	陰山ゼミ	黒川 瞳冴
オムロン株式会社	2008年経営学科卒	上坂ゼミ	小倉 遼 様
株式会社日本アクセス	2001年経営学科卒	波形ゼミ	安東 泰慈 様
小金井市長	1993年経営学科卒	小林哲也ゼミ	西岡 真一郎 様
ドルナスポーツCEO アドバイザー	1972年経済学科卒	有吉廣介ゼミ	安川 ひろし 様

インタビュー

経営学科4年	有吉ゼミ	樹神 佑香
経営学科4年	有吉ゼミ	齊藤 陽奈
経済学科3年	大床ゼミ	田辺 隆之介
経済学科3年	大床ゼミ	平野 拓梨
国際環境経済学科3年	徳永ゼミ	大谷 友哉
国際環境経済学科3年	徳永ゼミ	佐藤 早希
経営学科3年	山崎ゼミ	澤田 可奈子
経営学科3年	山崎ゼミ	奈良 萌華



幅広く深みのある人材へ

経済学科2年 徳永ゼミ 安孫子 瑛基

学びの本質

獨協大学に入って一番変わったことは、学習意欲の向上です。商業高校時代、資格取得に励んだことに後悔はしていませんが、本当の意味で“学んでいる”という感覚を得られなかったことも事実でした。一方、大学では様々な授業での新たな学びを通して、物事の流れや因果関係を掴めるようになってきたと感じます。そのような日々を過ごし、今は“学んでいる”という実感を強く持っています。

私は現在、第一志望であった徳永ゼミに所属しています。志望したきっかけは、1年次の徳永先生の国際金融論の授業でした。国際関係や財の動きが世の中の出来事に通じている点に魅力を感じ、日頃あまり気にしていなかった世の中のニュースに注目するようになりました。ゼミに入ってから、これまで蓄えてきたインプットをアウトプットする場があるということに喜びを感じています。現在は大学内の「第5回経済学部プレゼンテーション・コンテスト」に向け、「女性の社会進出のための子育てバンク」について研究しています。この課題には、保育園に融資をすることで潜在保育士の採用や事業面積拡大をして一層ニーズに応えられる保育園を増やしていきたいという思いを込めています。今後は秋の本番に向けてさらに準備を進め、納得のいく発表をしたいです。この課題は国際金融とは離れたものではありますが、様々な分野を学ぶことでさらなる自身の成長につながり、今後国際金融を学ぶ上でも生きてくると考えています。

学びを活かし新たな収穫を

大学で得た、物事を様々な角度から見るという学びの本質は、あらゆる場面で活かしています。中でも、オープンキャンパスの学生スタッフの活動でこれを実感しています。大学受験を控えている高校生の相談によく乗るのですが、その際には在學生である自らの視点に固執せず、相談者の視点に立つことを心掛けています。多面的に考えることで新たに見えてくるのが、最適なアプローチにつながっていると考えます。また、山形の郷土料理店でのアルバイトで得た気づきもありました。私は、大学進学を機に離れるまでは地元山形について深く考えたことなどありませんでした。しかし、意図せずに地元に戻つた店舗を選択していたことや、それにより同郷の方と話す機会が増えたことから、自分はここまで地元愛が強かったのだと実感しました。今まで気に留めていなかったことにも気づけるようになったのは、大学での学びがあったからこそです。

万に通じたジェネラリストへ

様々な学びの中で、少しずつ自らの将来のことを考えるようになってきました。私の理想の社会人像是、誰もが接しやすく、時にユーモアもあり、やる時はやる人物です。また、将来は観光業に携わりたいと考えています。これには地元山形への思いや、幼い頃から抱いているお客様の要望に何でも応えるホテルマンへの憧れが影響してい

ます。自分の理想像へ近づくためにはこれまで同様、勉強に励むことが大切です。しかし、机上の勉強だけでは足りません。大学で本当の学びに気づけたからこそ、これからもあらゆる視点を持ってさらに引き出しを増やし、様々な人との交流も継続しながら人間的な魅力を高めていきたいと思っています。今後は資格取得やインターンシップなど次のステージに身を置いて大学生活を充実させていきます。将来は、「万に通じたジェネラリスト」として活躍していくことが理想です。

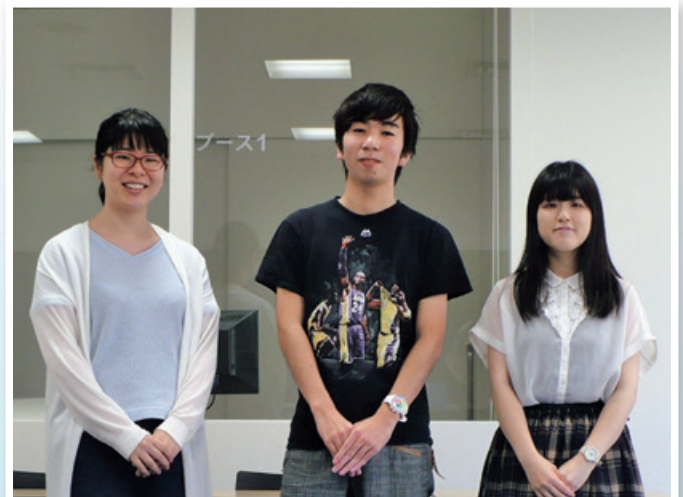
在學生・高校生へのメッセージ

大学は自分のやりたいことを見つける場でもあります。まずは、目の前の勉強に全力で取り組んでみて下さい。初めは気づかないことも多いと思いますが、徐々に学んだもの同士がつながっていく感覚を得られるはずですよ。そして、その新たな気づきや学びが皆さんの成長につながると思います。皆さんが大学で学びの本質を実感し、理想の将来像に近づいていけることを願っています。

インタビューより

ゼミを筆頭に学生スタッフやアルバイト、そして資格取得などの様々な活動に対して積極的に取り組み、自らの成長の可能性を広げていく安孫子くんの姿に大変刺激を受けました。私も、学生ならではの積極的な姿勢や発想を大切にして、残りの大学生活を有意義なものにしていきたいです。(樹神)

「学生の本分は勉強である」。この言葉をわかっていながらも、それを体現できている学生は少ないと思います。そんな中、安孫子くんは学びの本質を理解し、それを違う場でも応用しながらたくさんの気づきを得ていました。私も残り少ない大学生活での学びを突き詰めていきます。(齊藤)



柔軟に、貪欲に

経済学科3年 塩田ゼミ 春山 文宏

深く考え、様々な考えを受け入れる

獨協大学に入学し様々な授業を受ける中で、環境と経済を関連させた学びに楽しさを覚えました。現在、経済発展の弊害として環境汚染が問題視されています。環境問題が深刻化する中でどのような経済発展が望まれるかというテーマに興味を持ち、それを学べる塩田ゼミを選びました。ゼミでは主にプレゼンテーションとディベートをしています。プレゼンテーションはグループワークや見せ方などを学びつつ、環境経済について深く考えられる良い機会になっています。また、ディベートでは主に時事問題を取り上げています。賛成派、反対派のどちらにつかは当日に発表されるため、事前に両方の視点から意見を考えておく必要があります。これにより、物事を多面的に見る意識が高まりました。

ゼミ以外では、国際親善倶楽部(DIAC)と自身で設立したカフェ巡りをするインカレサークルで活動しています。DIACでは留学生を中心に草加在住の外国人の方も積極的に交流をしています。様々な国の友人ができたことで学生生活がさらに豊かになりました。また、インカレサークルは様々な人の考えを知りたいという思いから立ち上げました。出身大学や参加理由は人それぞれで、その分多種多様な考えに触れることができます。ゼミと並行してのこうした活動は大変さもありますが、それ以上に充実感があります。

人から認められるトップへ

様々な活動を通して個人としての充実感を高めるのと同時に、各団体のリーダーを経験したことで大きな学びを得ました。1年次はDIACの学年代表に立候補し、120人もの同期をまとめる苦勞を知りました。人数が多い分、予想外のことも多々起こります。初めはそれに戸惑いもありましたが、そうしたイレギュラーなことに対応するうちに動じない心を持つようになりました。2年次に立ち上げたインカレサークルは、自分が動かないことには人が集まりません。軌道に乗せるまでが大変でしたが、そこで先頭に立って行動したことで今は楽しさを得られています。また、ゼミ長として活動する中で一人ひとりのニーズに密着する姿勢が身につきました。例えば、自分の意見が言いにくい人には「どう思う?」といった広い質問でなく、選択肢を出してどちらに近いかを尋ねることで答えやすくするという工夫などを行っています。その人が何を考えているかを推し量ることで、何をすべきかが見えてきます。

このように自らリーダーシップを取って行動を起こせる原動力は、私が強く持っている向上心にあります。何事も1番でなければ嫌ですね。卒業時には周りから認められる人になりたいです。将来は保険会社に就職して、一人ひとりの思いを汲み取りアフターケアまで丁寧に行えるような働き方をしたいです。

在学生・高校生へのメッセージ

物事を諦めずにやりきる上で大切なのは向上心だと思います。同時に、それを持って行動することも重要です。私は高校3年生の秋まで部活動に打ち込んでいたため、同級生に比べて受験勉強の時間が確保できませんでした。しかし、それでもあの時諦めずに部活動をやりきって本当によかったと思っています。そう思えるのは、向上心を持って行動し続けたからです。そして、大学生になった今もこの意識を持ち続けています。皆さん、特に1、2年生ほど自由に動ける時間がたくさんあるので、向上心を持ってどんどん挑戦して行って下さい。

インタビューより

自分のことだけではなく、周りの人をどうやって動かすか、どうやったらやりやすい環境を作れるのかをしっかりと考える姿勢を見習いたいと思いました。また、大学内に限らず他大学や留学生との交流も積極的に行い、常に上を目指す心構えに刺激を受けました。私自身もこの経験を活かし、様々な交流を大事にしていきたいです。(田辺)

同学年でここまで高い意識を持ち、自分自身と正面から向き合う春山さんの姿にとっても感銘を受けました。また、獨協大学内だけでなく他大学や海外との交流も大切にするなど、私にはない経験をされていたのでとても刺激を受けました。多くの方、特に学生の皆さんにこの記事を読んでいただきたいと思います。(奈良)



線につながる点

経済学科4年 陰山ゼミ 黒川 瞳 冨

人とのつながりを大切に

高校生の時に獨協大学のオープンキャンパスを訪れた際、学生スタッフの方に受験応援のメッセージカードをいただきました。それを持って入学し、その方と再会してから私も学生スタッフとして働き始めました。今度は私が接した高校生が獨協大学に入学し、現在一緒に働いています。些細なきっかけですが、こうしてご縁がつながっていくことに人とのつながりの面白さを感じています。

私が所属する陰山ゼミのテーマは、「モノづくりと価値づくり」です。モノづくりでは商品開発を学び、価値づくりでは理想の自分に近づくために自身の価値向上をしています。私は、特にこの価値づくりに関する活動が印象に残っています。ここでは、初めて出会った方との信頼関係の作り方を学びました。私のゼミは企業訪問やセミナーなど、社会人の方とお会いする機会が多くあります。その中で憧れを抱いた方やもう一度お会いしたいと思った方にはすぐにお手紙やメールを送り、誠意が伝わるように心がけていました。

また、ゼミ以外ではカナダへの短期留学や地元秋田への一人旅を実施しました。英語力の向上や地元の魅力を再発見できたことはもちろん、どちらも人の温かさを感じた大切な経験となりました。このような活動を通して、私は多くの方から刺激を受けました。それが自身の価値づくりにつながっていったと思います。

“なりたい自分”を持つ

世間では他人と比較されることが多々ありますが、私は様々な評価軸の中でも自分を見失わないように、“なりたい自分”をしっかりとイメージしています。これは就職活動をする上でもとても役に立ちました。私の理想は結婚や出産を経ても仕事を続けることと、地元秋田に貢献することの2点でした。これは獨協大学での4年間を通して固まった軸です。就職活動は他人と比較されることがつきものですが、私は人と比べないという視点を大切にしました。自分の軸を大切にして行動していれば、自ずと道は拓けると考えたからです。4月からは証券会社に就職し、秋田に勤務します。就職活動を納得した形で終え、なりたい自分へ一歩近づいたことに喜びを感じています。

“YES Woman”

大学生活を一言で表すと“YES Woman”です。「これやってみない？」と聞かれたらほとんど全てのことに「やります。」と答えています。機会をいただけそうな時は自分から掴みにいくことをモットーとしていて、そのおかげでたくさんの経験ができました。時には複数のことを同時に進めなければならないこともありました。目の前のことを一つひとつ確実に終わらせることでしか前には進めません。そのため、毎日やることリストを作り、一つずつ終わるたびに線を引き、達成感としていました。

在学生・高校生へのメッセージ

大学生活ではどんなことでも楽しむように意識していました。大変だと思ったことはあまりありません。なぜなら、何事も無駄にはならず、むしろやらないで後悔する方がもったいないからです。皆さんはこれからの進路でたくさん悩むことがあると思います。しかし、最後に信じられるのは自分自身です。自分が思う幸せを大切に、信じた道を諦めずに進んで下さい。

インタビューより

3学年末までオールA(AA含む)を維持してきた学生の鑑とも言える黒川さんにお話を伺いました。初めはとても真面目な方なのではと感じましたが、真面目というよりも自分をしっかり持っているという印象を受けました。今、“なりたい自分”を自分の言葉で明確に伝えることができる人は少ないのではないかと感じます。他人と違う考えや行動は悪く評価されてしまうと不安になりがちです。そのような中でも、後悔せずに楽しむことを常に意識されている黒川さんのような人になりたいと思います。(大谷)

様々な活動に取り組まれている黒川さんからは、経験に裏付けられた自信が感じ取れました。今回のインタビューで、やっておいて損なことはないのだと改めて思いました。チャンスを自分から掴みにいく姿勢や何事も楽しむ気持ちを私も見習っていきたいです。(佐藤)



向き合って、踏み出して…

オムロン株式会社 2008年経営学科卒 上坂ゼミ 小倉 遼 様

日々、素直に向き合うこと

私が大学生を送っていた今からおよそ10年前、それはライブドア、楽天、サイバーエージェントなどベンチャー企業のニュースが世の中を席捲していた時代でした。そのような時代の影響もあったのでしょうか、漠然とではありますが、自分の中で芽生えた「世に新しい価値を生み出したい」という思いを胸に獨協大学の門を叩きました。私は学生時代、周囲に大人しい印象を持たれがちでしたが、それには「素直に受け入れ、適応していく」というモットーが関係していると考えています。これは、ただ受け入れるということではなく自分の意見も相手に理解してもらうために、まずは相手に真っ直ぐ向き合おうといった意図があります。この境地に至るきっかけは、父の仕事の都合で幼少期をヨーロッパで過ごした経験でした。帰国後、日本では当たり前となっている様々な風習に初めは驚き戸惑ったことを覚えています。それを乗り越えるためには、一つひとつ地道に向き合っ「素直に受け入れること」と「適応していくこと」で徐々に慣れていくしかありません。勉強もスポーツもコツコツと努力するタイプで、何の役に立つのか不明確なことに対してもいつか役に立つ日が来ると考えていました。だからこそ、何事も正面から向き合い、受け入れて適応していくことができたのだと思います。

また、この姿勢は大学時代に所属したベンチャービジネス論専攻の上坂ゼミでも通じています。ゼミに入った当初の活動には、貸借対照表や損益計算書の見方の学習やインタビューを通じた草加市の商店街活性化プランの立案など、ベンチャー企業に対する自分のイメージとはギャップを感じる面もありました。しかし、定量・定性の両面から企業を分析する基礎を学べたことは今振り返っても大変有意義だったと感じています。このように、何事も素直に向き合う姿勢を持つことで初めて新たな学びを吸収することができました。

広い視野で自分の立ち位置を知る

私が大学時代、ゼミ活動に加えてインターンシップに力を入れたのは、「より広い社会で新たな可能性を試したい」という思いからです。もちろん大学の勉強においても学びの楽しさを見出し、有意義な時間を過ごすことができました。しかし、裏を返すとそれは学内という限られた範囲での学びにすぎず、異なる価値観を学ぶ機会を減らすことに繋がります。私はこのことに危機感を持ち、他大学の意識の高い学生との交流や競争によって新たな視点から見た自らの可能性を知りたいという思いでインターンシップに参加しました。中でも、(株)ワークスアプリケーションズのインターンシップでは、次々と難題が課せられて質の高い発信が求められます。そのような環境でがむ

しゃらに取り組んだことで、「自分の立ち位置は低い」という参加以前に抱いていた思い込みを払拭して自信をつけることができました。つまり、普段とは異なる角度から新たな自分の立ち位置、可能性を知ることができたのです。

また、上坂ゼミにて社会で活躍されている経営者の方々をお招きし、その深みのある考え方に触れられたことも新たな視点を学ぶ貴重な経験になったと感じています。このような機会を通して、外に飛び出して周囲の様々な価値観に揉まれる大切さに気づくことができました。

習うは一生

私が仕事をする上で大切にしていることは「お客様の声を素直に聞くこと」と「先回りをして発想すること」です。まずお客様の本当の声を聞くためには、時間をかけて信頼をコツコツと積み上げていかなければなりません。その過程の中で、お客様の意見を一つひとつ受け入れて本当に求めているものを見極めることが大切です。現在私は営業からマーケティングに転じましたが、同時に新たな壁にも直面しています。営業職時代と比べてお客様と直に接する機会が減り、一歩ずつ関係性を築いていくことが難しくなりました。そのため、今まで培ってきたことに加えて、自社の製品や部品に何が求められるかを常に先回りして考えるようにしています。

今後の目標としては、海外に飛び出して社会課題の解決に貢献する商品を創り、それが当たり前で使用される世の中にしていきたいです。この目標に到達するべく現在は終業後、夜間のビジネススクールで勉強に励んでいるところで、いずれは経営学修士(MBA)の取得も考えています。それこそ、この活動も弊社という常時所属しているコミュニティの枠を飛び越え、意識の高い社会人の方々と切磋琢磨することで学生時代から10年経った現在でも新たに気づき、学ぶことが大いにあります。私にとって人生は常に勉強です。

学生へのメッセージ

学生の皆さんには外に飛び出して、周囲の様々な価値観に揉まれる経験をしてほしいですね。しかし、ただ挑戦するだけでは意味がありません。異なる意見に対しても真っ直ぐ向き合って、学ぼうとする気持ちが大切です。そのためには、日頃から何事も真摯に向き合う姿勢を忘れずに持っていてほしいですね。異なる価値観を学ぶ経験はどんなことでも構いません。自分が決めた新しい場所へ、自分の力で一步踏み出しましょう。異なった人生を歩む人々の価値観に触れることで、新たな発見や学びを得ることができるはずです。様々な角度から自らの立ち位置を捉えた上で、夢や目標を深く追求して今この瞬間から自らの可能性を切り拓いていって下さい。



インタビューより

外に飛び出して周囲の様々な価値観に揉まれるべきという言葉には、何事も真摯に向き合って限界を決めずに自らの可能性を切り拓いてきた小倉様の芯の強さを感じました。また、素直に適応していくという姿勢も新たな学びを得る上で大切なことだと思いました。私も小倉様のように自らの限界を決めず、外の世界へ踏み出して新たな学びを吸収し続けたいです。(樹神)

学生時代から新しい価値を生み出すという信念を持ち、その思いを軸に大学から現在に至るまで様々なチャレンジをされている小倉様の言葉は、一つひとつがためになることばかりでした。また、小倉様は初対面の人でも自分の世界に引き込むような魅力があり、私自身、何か新しいことにチャレンジする姿勢を忘れないようにしようと思いました。(澤田)

自分の力で社会をさらに良くしていきたいという強い信念を持ち続ける小倉様に、非常に感銘を受けました。違う環境に飛び込むことや時には挫折すること、常に挑戦し続けることが大事であると感じました。勉強でもスポーツでも根底には日々の努力があり、それを怠ってしまうと成功していくことは難しいと考えさせられました。この経験を私自身の今後に活かし、挑戦していきたいと思います。(田辺)

指導教員(上坂卓郎教授)からのコメント

小倉遼君とは基礎演習から通算して3年間一緒に学びました。外見は少しはにかんだ笑顔の大人しい感じでしたが、課題やゼミ論文をきちんとこなし安心して見ていられるタイプで、また一面で自分の思いを胸に秘めた強いところを持っている印象を受けました。卒論は『日本のベンチャー企業はなぜドメスティックなのか～グローバル・ベンチャー輩出国アメリカから学ぶ～』というもので、しっかり日本のベンチャー企業の問題点を米国と比較的確に指摘しており、論旨も一貫した好論文でした。就職はグローバルに活躍できる京都の代表的ベンチャーであるオムロンを選択し、好きな語学も活かして手堅く仕事に邁進しているものと推察しています。

楽しいではなく“楽しむ”

株式会社日本アクセス 2001年経営学科卒 波形ゼミ 安東 泰慈 様

芯にある負けん気

2001年入社 私たちにとって、社会人生活のスタート当初はそれまでの方程式が通じなくなったまさに激動の時代でした。厳しい就職戦線を潜り抜けたにもかかわらず、その先に待っていたのは、年功序列や終身雇用の崩壊、パソコンの普及、IT系企業やベンチャー企業の台頭など、社会の著しい変貌でした。それに加えて、所属する組織も統合や合併を繰り返し、会社の変化も同時に感じるようになります。そのような中、入社時には「付加価値を提供したい」「消費者とお取引先のマッチングをしたい」などと大きいことを言っていたにもかかわらず、実際には思い描いていたよりも小さい仕事をやっている自分がいました。仕事は楽しかったのですが、その反面「これでいいのかな?」という思いも抱いていました。また、仕事の全体感もわからなかったため、「どうして全国卸の弊社が地元の卸に負けてしまうのだろう?」などと思ったこともあります。さらに、お取引先の方と対等に話せるようになった手ごたえを感じつつも、若手で権限のなかった自分に歯がゆさを覚えたこともありました。しかし、こうしたマクロ環境の変化や悔しい思いを言い訳にはしたくありませんでした。22歳の自分が選択した進路でとことん勝負してみたいという思いを強く持っていたからです。理想と現実のギャップを感じるものがあっても、それを嘆くのではなく、目の前の業務に向き合い、与えられた環境の中で諦めずにやることで結果も成長もついてくると考えています。

より高いレベルの刺激を与え合える関係

大学時代からこれまでを振り返ると、本当にたくさんのお会いがありました。大学では、ハンドボール部の仲間との出会いが強く残っています。部員が少ないながらも4年間やり切り、次に繋げられたことは今でもよかったと思っています。また、メンバーとは今でも定期的に集まり、かつての熱い日々のお話を花を咲かせています。現在は全員がそれぞれ違ったフィールドに立っていますが、だからこそ生まれる様々な話が良い刺激になっています。社会人になると仕事以外の人間関係を作るのは難しいと言われる中で、こうした濃い繋がりを今でも持ち続けられていることを嬉しく思います。

そして、入社してからも社内やお取引先など様々なコミュニティに属する方々と接してきました。一つの評価軸や価値観に囚われない新鮮な自分でいられると感じています。しかし、同時に強く抱くのは、周囲から刺激を受けるだけでなく自分自身もそれを与えられる存在にならなければという思いです。特に、現在俗に言うミドル層に位置し先輩後輩の双方と接する私にとって、今後これはますます大切になってくると思います。そのため、いつ誰と出会っても然るべき自分でいられるよう、準備を怠らないようにしています。何か一つのために備えるというよりは、日頃から目の前のことをきちんとやって成長することが結果として良い準備になると考えています。一見遠回りに思えることもあるかもしれませんが、真摯に向き合えば振り返った時に糧になっているはずです。そうして自分がレベルアップしてこそ得られる刺激の質も上がり、次に繋がる関係を築くことができます。決して短期的な見返りを求めて動くのではなく、長期的にご縁を繋げていくことを心に留めています。一回の関係で終わるのではなく、2、3年後に急に連絡しても覚えていてもらえる関係でいたいですね。

オンリーワンであり続ける

私は、会社の中でオリジナリティのあるキャラクターでいたいと思っています。皆が真っすぐ走る中で横串を通せるような人物であり続けることが理想です。思えば、昔からそのような立ち位置を担うことが多かったように感じます。大学で所属していた波形ゼミでは、日本経済新聞の記事について意見交換をしていました。ゼミでの時間を重ねる中で、こう言われるだろうから事前に調べておこう、仮説を立てておこうと自然に準備を重ねるようになっていったのを覚えています。誰に言われたわけではありませんが、新たな視点やネタを提供することが自分の与えられる価値だと考え、行動していました。また、会社に入ってから、お取引先が知らない情報を持って行ったりきちんと話を聞いたりすることを心掛けていました。弊社のことももちろん





考えますが、営業色を前面に出すというよりは、何をしたら喜んで下さるのかに重点を置いていました。そうして、相手から「うちのためにやっている」と思っただけなのが自身の喜びとなりました。

このように、基本を押さえつつ付加価値をつけることで、周囲に良い刺激を与えることができると考えます。そのために大切なのは、相手が求めていることを察知し、自分がすべきことをすることです。相手というのは決してお取引先のことだけではありません。自分の部署や会社の事情も考慮し、全体を俯瞰しながら最適な選択をするようにしています。そうして相手に与えた刺激は、巡り巡って自分に返ってきます。つまり、与えることは得ることに繋がるのです。そして、それを繰り返しながら常に自分をアップデートできます。これからも、人を繋ぎ、人が気づかないことにも気づいて行動できる自分であり続けたいと思います。

学生へのメッセージ

私が仕事をする上で大切にしている心構えは、「楽しいではなく、“楽しむ”」です。楽しいことを楽しむのは当たり前ですが、逆境であっても楽しむ、これこそが重要だと思っています。今厳しいから諦めるのではなく、そこで楽しみながら頑張ることが力になります。10年後には笑って話せるはずです。自分が成長できる選択をすること、相手の期待を理解してそれ以上に成長することが大切です。自分の選択を精一杯楽しむことで自分、そして将来を大きく変えていきます。皆さんもぜひ意識して下さい。

インタビューより

私にとって社会人の方にインタビューを行う機会は今までなかったのですが、得るものが多く貴重な体験になりました。特に、安東様は様々な業務を経験されてきたこともあり、一つひとつの物事に対する視点の多さには驚きました。また、経験が無駄にせず、今に活かしている印象を受けました。今まで漠然としていた「どんな経験も自分の糧になる」という言葉が、安東様にお会いしたことでより実感できました。(大谷)

何でも聞いて!と大きく構えた方も素敵ですが、学生に対しても真摯に準備を重ね、こちらの意図に沿うようにと考えを巡らせて下さる安東様の姿勢に大変好感を持ちました。また、万全の準備をしながらも手元の資料に頼らずご自身の言葉で話して下さる姿には、日頃から考えて行動されていることが窺えました。4月から社会人になる私にとって、また一人目標とする方が増えました。(齊藤)

安東様は出会いを大切にしている行動的な方だと感じました。また、人との繋がりの中で多様な考えを吸収すると共に、自分の考えを深めることが現在の自信に繋がっていると思いました。ハンドボール部で身につけた常に上を目指す姿勢や人との関わりを創っていくこと、ゼミで議論を重ねたことなど、大学での一つひとつの経験が安東様の社会人生活に生きていました。私もこれからの大学生活をさらに充実させていきたいと思っています。(平野)

決意した“道”を信じて

小金井市長 1993年経営学科卒 小林哲也ゼミ 西岡 真一郎 様

気づきと覚悟

政治の世界については、自分から関心を寄せていったものではありません。むしろ、無理やり政治の世界を見せつけられたことがきっかけです。19歳の頃、普通のサラリーマンであった父が突然「小金井市で市議会議員選挙に立候補する」と言い出しました。政治の世界にどこか悪いイメージを持っていた私は非常にショックを受けて家を飛び出し、一人暮らしをしながら大学受験に集中しました。父が重大なことを決断したとわかっていながらも反発する気持ちが強く、手伝いも一切しなかったのです。結果は落選。悔し泣きする父の姿を見て、「子どもたちのために一生懸命やりたい」という立候補に賭けた父の本当の思いを知り、後悔の念を禁じ得ませんでした。

「4年後の選挙では父のことを応援して支えたい」という思いから、決して好きな分野ではなかったのですが、大学入学後は政治に関連した講義を受講するなど意識的に政治の世界へ携わるようになっていました。大学4年次、バブル崩壊後の不況という厳しい時代背景の中で、当初は「名のある一流企業に就職できればいいなあ」などといった周囲に流された就職活動を行っていました。しかし、一方でそのような就職活動にどこか違和感を覚える自分がいたのです。あるとき、ふと自分も政治の世界に関心を抱き始めていることに気づきました。また、父が次の選挙への出馬を断念したことから、今度は自分が頑張らなければという思いが一層強まり、政治の世界に飛び込む覚悟を決めました。

ピンチをチャンスに!

自由民主党本部と新党さきがけ本部で4年間働いた後、27歳で初めて小金井市議会議員選挙に出馬しました。理由は3つあります。1つ目は、先ほど述べた「父が果たせなかった夢を私が果たさなければ」という思いです。2つ目は、政治家としての師である武村正義先生から「地方自治の可能性と楽しさ」を教えていただいたことです。武村先生は新党さきがけの結成や内閣官房長官、大蔵大臣などの要職を歴任したことで知られていますが、滋賀県八日市市長や滋賀県知事など地方自治に精通された方でした。自民党本部勤務時代から上司である武村先生の薫陶を受けたことは今も忘れません。3つ目は、「小金井にどんな貢献ができるか」です。小金井市は幼少期より長く住み慣れた地ですが、当時の財政状況は大変厳しいものがありました。そこで、地方自治を仕事とするならば小金井からと思いました。以上の理由から無所属にて立候補し、当選することができました。最初の市議8年間は小金井市の財政再建に尽力し、その後都議会で活動の場を転じましたが、引き続き自治体経営のあり方について勉強させていただきました。

3期目を目指す都議会議員選挙での落選は大きな転機でした。落選中の充電期間の送り方は、一般的には代議士秘書など何らかの形で政治に関わる人が多いようです。しかし私は、一度外から政治の世界を見たいという思いから、保育関連の民間企業に就職しました。落選経験を“ピンチ”といったマイナスだけでとらえず、外から政治を見ることのできるプラスの“チャンス”だと考えたのです。保育園の事務長を務めることになった私は、多くのことに気づきました。まず、保育士さんたちが厳しい環境の中でもやりがいを持って一生懸命働いているということです。また、保育園は多くの方々のチームワークが重要でした。そして何より子どもの成長が楽しく、子育ての現場を見せていただいたことはとてつもなく良い経験でした。都議会でやり残したこともあり苦悩しましたが、様々な経験を経て周りの意見を聞くことの大切さに気づき、小金井市長として立候補する道を選択しました。国政スタッフを4年、市議会と都議会で16年を経験し、保育園に勤め、国や都そして市を内外から見つめてきたことは今の自分の強みとなっています。



学生へのメッセージ

私はよく「“ないものねだり”より“あるもの探し”をしよう」と言います。「あるもの」は常に存在するものですので、時としてその価値を見失っていることがあります。例えばまちについても、他のまちの良いところを羨ましく思って真似をしたくなってしまうものです。しかし今「あるもの」、小金井市であれば地の利が良く、緑に囲まれた住みやすさをはじめとする良いところがたくさんあります。このように私は「あるもの」に付加価値を付けて磨いていくことが大切だと考えています。

「大学は学問を通じての人間形成の場である」という天野貞祐先生の言葉にあるように、大学時代の4年間をどう生きるかが大切です。さらにその先の就職活動においても、ブランドやトレンドばかりを意識するのではなく、どの“道”を行くのか決めることです。まだ選択できていない方は、ぜひ自分の進むべき“道”を選択するための4年間にして下さい。そして、何より「流されず焦らないこと」が大切です。周りが就職しているからといって必ずしも就職しなければいけないということはありません。大学院や留学に行く選択肢もあります。20代のたった1、2年などは10年も経ってしまえばほとんど関係ありません。多少出遅れてもいいのではないのでしょうか。

インタビュワーより

西岡様は、学生時代から大変なご経験をされている中でもピンチをチャンスにとらえる前向きな芯の強さと、ご家族や市民の皆様をはじめとした多くの方々に寄り添って行動ができる優しさを兼ね備えていました。私も西岡様のように流されず焦らずに自分の“道”を見極めていきたいと思えます。お忙しい中、大変貴重な機会をいただいたことに改めて御礼申し上げます。(樹神)

ピンチをチャンスに変えることはなかなか容易なことではないと思えます。何事もプラスの方向に変えていくことのできる西岡様はとても強い方だと感じました。これから大変なことや困難なことがあった時に、何事もプラスにとらえることができるよう胸に刻みたいですね。貴重なお話を伺うことができ、大変有意義な時間でした。(佐藤)

指導教員(小林哲也教授)からのコメント

西岡君は、ゼミの第2期ゼミ長でした。ゼミのテーマは、現在と同じく世界経済や多国籍企業の動向に関するものでしたが、西岡君の卒業研究のテーマは、日本における政治改革でした。就職に関しても普通の企業ではなく、自民党本部に職員として就職しました。90年代前半は、小沢一郎氏による造反、武村正義氏による新党さきがけの結党など、日本の政治が大きく動いた時代でした。このときに西岡君も自民党を飛び出し、武村氏の新党に志願して飛び込んだのでした。小金井市議選での事務所開きが、ついこの間のような気がしますが、政治改革への志は、初志貫徹といえるでしょう。



思いを託した祖父、道を拓いた自分

ドルナスポーツCEO アドバイザー 1972年経済学科卒 有吉廣介ゼミ 安川 ひろし 様

パッションを持って

「好きなことをやりなさい」…これは大学入学時に祖父である天野貞祐から言われた言葉です。大学時代は自分のために時間を使える分、責任も自分にあります。「この先は長いから、4年間で自分が本当にしたいことを決めなさい」というメッセージでした。私はその言葉を胸に、やりたいことを一生懸命やろうと決意して、獨協大学の門をくぐりました。

大学時代は自動車レースに没頭しました。アマチュアとして様々なサーキットに足を運び、19歳で全日本チャンピオンになりました。結果が出たことも嬉しかったですが、自分が一生懸命やることによって色々な方のお付き合いが広がったことが大きな財産です。また、アメリカでフォードやグッドイヤーの工場を見学したのをはじめ、卒業までアジアやヨーロッパ各国を巡り、様々な文化や価値観に触れたことは、自分の輪を広げる有意義なものだったと思います。このように様々な経験をしながら、自分の本当にしたいことはモータースポーツだと思いが芽生え、卒業後は(株)ブリヂストンに入社しました。

しかし、入社した頃に大きな壁が立ちました。石油ショック等の影響で、会社がモータースポーツから撤退してしまったのです。モータースポーツに携われないことがわかり入社早々退職を考えた時、祖父は「石の上にも3年だ」と言いました。会社に残ることを決意した私は、モータースポーツへの思いを訴え続け、4年後の1976年にモータースポーツ担当部署が再開されました。そこからはF1のタイヤを作るべく奮闘し、私の思いは実現していきます。F1は世界最高峰の自動車レースであり、高い技術力と莫大な費用を要します。そのため、私が入社した当初は夢の世界で、社内では参加などとてもないことでした。しかし、それでも私は「いつか参加できる会社になりたい」と夢見ていました。それが形になっていく歴史に携われたことは大きな喜びです。

私は、目標を実現する上で大切なのは“パッション”であると考えています。これがあれば、目標への努力を絶やさずにいられます。大学入学時に祖父が言った「好きなことをやりなさい」という言葉は、責任は自分で持ち、しっかりと自分の足で立つという意味でもあったと思います。私はこの“パッション”があったからこそ、揺るがない強い足を手に入れることができました。また、“パッション”があれば人と通じ合うこともできます。モータースポーツは信用で成り立つ部分が多いことに加え、日本人とは異なった価値観を持つ外国人たちの心を動かさなければいけません。そんな時に自分が“パッション”を持っていないればどうなるのでしょうか。おそらく真の人間関係を築くことはできないでしょう。祖父の教えを胸に、自分で培った“パッション”を持ったからこそ、ここまで来られたと思っています。

自ら、そして周りをポジティブに

やりたいことが仕事であることは幸せですが、全てが順風満帆だったわけではありません。これまでにたくさんの失敗をしてきました。しかし、その失敗が自分を強くしてくれたと言えます。それは、失敗を次に活かして成長してきたからです。以前、想定外の環境下でタイヤがうまく機能せず、レースに勝てなかった時がありました。チームからは怒られましたが、私は「誰にでも失敗はあるからもう一度やらせてほしい」と頼みました。勝てなかったことばかりに目を向けていては何も始まりません。次を見据え、どう立て直すかが大事なのです。その後はテストを繰り返して万全の準備を重ね、次のレースではチャンピオンになることができました。私は、失敗から学んだら悪いことは忘れ、次にもっと良い結果出すためにはどうしたらいいかを考えることに集中します。弱気になる時ももちろんありますが、前を向くことで乗り越えてきました。

また、仕事の上ではチームワークが必要不可欠です。例えば先程のような失敗があった時も、チーム全員が同じボートに乗っているという気持ちがなければ問題解決には至りません。長らくモータースポーツ推進室長であった私は、チームがいかに活き活きと働けるかというマネジメントの視点を常に持って行動していました。このような視点が持てるようになったのは、祖父と大学時代のゼミ活動が影響していると感じます。まず、祖父からは「挨拶をすること」と「人に感謝すること」を教わりました。私は幼い頃、祖父が運転手さんやメイドさんなど、自分の周りで働く方に対して心配りをする様子を傍で見てきました。その中で、周りの方を大切にし、皆で一丸となることの重要性を体感したのを覚えています。また、大学時代に所属した有吉廣介先生のゼミは産業の社会心理をテーマに掲げていて、働く上での道徳やモラル、モチベーションについて学びました。そしてそれは、働く人のモチベーションを上げ、チームワークを大切にする祖父の教えと重なったのです。今まで体感してきたことを理論で学んだ瞬間でした。人間は皆平等です。それは仕事の上でも変わりません。誰とでも話して、良いところをいただきながらこれからも成長していきたいです。

学生へのメッセージ

私は祖父が66歳の時に生まれました。たくさんの尊敬できる友人に出会った今でも、尊敬する人と言えば偉大な祖父です。祖父は私に人としてのあり方を教えてくれたばかりでなく、80歳で獨協大学を創設し後進の育成に心血を注ぎました。そして、おじいちゃん子だった私も現在は67歳です。あの頃の祖父に負けないように私もますます精進し、若い世代に色々なことを伝えていかなければと思っています。そして、皆さんには目標を持ち、世界に向かって挑戦していただきたいです。そのために、たくさんのことを経験して自分の世界を広げて下さい。また、同時にこれについては自分が一番知っていると胸を張れるものを持つことも大切です。ぜひパッションを忘れずに、目標に向かって励んで下さい。皆さんが世界へ羽ばたき、日本を元気にしてくれることを願っています。



インタビュワーより

安川様の「ひろし」というお名前は、尊敬する御祖父様が自らのお名前である「貞祐」の“祐”の字を取り、世界で羽ばたけるようにとの思いを込めてひらがなで名付けたそうです。そんな御祖父様の教えを吸収し、自ら考えて行動してきたからこそ、現在の安川様があると思いました。そして、安川様のご活躍を一番喜んでおられるのは、他ならぬ御祖父様であると感じました。(齊藤)

安川様のお話は聞いていてとても楽しく、あっという間に時間が過ぎてしまいました。初対面の私たちにも気さくに接し、目をしっかり見て受け答えして下さいました。たくさんの方々とお仕事をされてきた安川様が今でも信頼を得ているのは、技術や知識はもちろんのこと、仕事や人と向き合うためのパッションを忘れないお人柄があるからだと思いました。(澤田)

安川様は私たち一人ひとりの目を見て熱心にお話して下さい、初対面でしたがそのお人柄の良さを感じました。大学時代のお話やお仕事でのご経験、またそこでのたくさんのお会いについて伺うことができ、短い時間でしたがとても貴重で有意義なひとときを過ごせました。多くの方々にこの記事を読んでいただきたいと思います。(奈良)

第5回 経済学部プレゼンテーション・コンテスト開催報告

～天野貞祐記念館大講堂で8チームが熱戦～

企画趣旨

第5回経済学部プレゼンテーション・コンテスト(以下、プレコン)が2017年10月25日(水)、天野貞祐記念館大講堂において開催されました。プレコンは、①問題解決型プレゼンテーション能力の向上、②研究活動・ゼミ活動の成果の紹介などを目的に、2013年度に新設された制度です。

書類審査の提出期限(6月30日)までに、10のゼミから計20件もの参加申し込みがありました。学生支援制度実行委員会で慎重に審査した結果、その中から8チームを本選出場チームとして選出しました。

本選実施要領

- (1) 研究活動やゼミ活動に関連するプレゼン
(1チームにつき少なくとも3人が発表)
- (2) 1チームの持ち時間は15分
- (3) 想定する聴き手は、参加チームが取り上げる研究活動分野に馴染みのない獨協大生



▲発表者の皆さんと審査委員

審査基準と結果

審査基準は、プレゼン内容(問題設定、論理展開、革新性、実現可能性)、プレゼン手法(言語表現、ストーリーテリング、資料の完成度)、チームワーク、全体的評価です。経済学部の教員8名が審査委員を担当しました。

8チームのプレゼンは、いずれもレベルが高く、普段の活発な調査・研究活動の様子が窺えるものばかりでした。審査委員会による厳正な審査の結果、各チームと個人(2名)に賞状(と頭彰金)が授与されました。

最優秀賞 高安ゼミ 減災かけはしチーム **優秀賞** 徳永ゼミ 保育園に通わせ隊、木原ゼミ 教育班

経済学部長奨励賞 山森ゼミ Aチーム **アイデア賞** 岡部ゼミ Team infinity、大床ゼミ 5代目 O Soul Brothers

敢闘賞 高松ゼミ Team Timberland、堀江ゼミ Horie Lab

ベストプレゼンター賞 磯部真由子さん(木原ゼミ、国際環境経済学科4年)
(個人表彰) 初貝健太郎さん(高安ゼミ、経営学科3年)



▲最優秀賞を獲得した高安ゼミ・減災かけはしチームの皆さん



▲ベストプレゼンター賞を獲得した磯部さん(左)と初貝さん(右)

出場チームとテーマ一覧

◎経済学科

- 高安ゼミ 減災かけはしチーム
「獨協大生が繋ぐ地域社会～大学×学生×草加で挑む減災プロジェクト～」
- 徳永ゼミ 保育園に通わせ隊
「『保育園バンク』の創設—私たちのおカネを社会課題の解決に役立てるために—」
- 山森ゼミ Aチーム
「日本の持続的な発展と公共インフラ」

◎国際環境経済学科

- 大床ゼミ 5代目 O Soul Brothers「インターナショナル・シェアハウスのマーケティング」
- 木原ゼミ 教育班「ミャンマーの教育問題」

◎経営学科

- 岡部ゼミ Team infinity
「地域を支える食育の場～こめたんじゅく～」
- 高松ゼミ Team Timberland
「過疎化とエコノミック・ガーデニング—飯能市を中心に—」
- 堀江ゼミ Horie Lab
「家庭菜園を身近にするIoTデバイスと栽培管理データベースの開発」

インターナショナル・シェアハウスのマーケティング

大床ゼミ 5代目 O Soul Brothers 田辺隆之介・平野拓梨・隈元裕太・深津祐介・永井博・青木直人・遠藤瑞季・為谷悠介・松本彩美・松本理美・津田優希・山本真巳子

報告要旨

大学の学生寮は在学生のみを受け入れていた過去とは違い、今や多国籍の学生が集まる空間へと生まれ変わっている。獨協大学が他大学との差異をつけるにはどのような行動をしたらいいかと考えたところ、インターナショナル・シェアハウスに辿り着いた。私たちは獨協大学を今よりもさらに国際色豊かな大学へとするために、留学生に二度調査を行った。

私たちが普段学んでいる社会調査を交えてどのようなコンセプトのもと、インターナショナルな寮が好まれるか需要側の意向を調査することとした。インターナショナル・シェアハウスとは、日本人在学生だけでなく海外から来ている留学生も共に生活する寮である。我々はこれにコンセプトという魅力を付け足したら、どのくらい人の興味関心が惹けるか調査を行った。

我々は、ベストワーストを用いてどのコンセプトが好まれるか計測することで上記の調査に取り組んだ。選択アイテムには、観光、伝統文化、サブカルチャーなどを挙げた。分析の結果、観光や食文化といった楽しみを用意し、日常生活のサポートスタッフを配備し、日本語や日本語文化のコンセプトを用意し、健康やマナーについての講座を整備する、というように、学生に望まれた順にシェアハウス運営を考えていけば、国内外の学生の居住需要が見込めると示唆された。

このようなインターナショナル・シェアハウスには、3者に効用がある。獨協生にとっては語学力の向上・国際的な交友関係・居住先の選択肢増加が見込まれる。留学生にとっても日本人学生にとってもよい学びの環境となるだろう。獨協大学にとっては留学生の増加による経営の安定やブランド力向上が狙えるだろう。草加市にとっては日常生活サポートやマナーある留学生・日本人学生が増加することで秩序ある国際学園都市化が狙え、地域活性化の一助となるだろう。なお、我々の今後の課題として、よりよい調査票設計とより精緻なサンプリングが挙げられる。

コンテストを通じて得たもの

私たちはコンテストを通じて、以下の点に気付くことができました。

1つ目は事前準備の大切さです。取り掛かりが十分でなかったことから、パワーポイントや原稿について満足のものを作ることができませんでした。しっかりと計画を立て、プランを進めていくことが大切だと気付きました。

2つ目は、ゼミ活動はたくさんの方にお世話になっているということです。今回のコンテストでたくさんの方にお力添えをいただきました。大床先生をはじめ、ゼミの先輩、他のゼミの方々、コンテスト運営ス

タッフの皆様。ご迷惑をおかけすることもありましたが、結果的にアイデア賞という形に残る成果を上げることができました。大変お世話になりました。今後は、この経験をメンバーそれぞれの活動に生かしていきたいと思います。

(文責：経済学科3年 田辺隆之介)

指導教員(大床先生)からのコメント

大学キャンパス内とはいえ、Intercept Survey(インタビューアンケート)を全員で行い、度胸のあるメンバーであった。重要なのは能力開発に加えて有効な形で費やした時間であり、事前準備が肝心であるという今回の経験を携えて、今後の社会生活を力強く歩んでいくものと確信する。



地域が支える食育の場 ～こめたんじゅく～

岡部ゼミ Team Infinity

この度は、第5回経済学部プレゼンテーション・コンテストにおいてアイデア賞を受賞でき、大変光栄に思います。ここでは発表させていただいたアイデアの内容とこの取り組みの感想を書かせて頂きます。

私たちは家庭で食育ができていない小学生に向けた食育を学べる塾『こめたんじゅく』を提案しました。生活習慣病の増加・孤食・肥満等、食に関する問題が顕在している中で、小学生は心身の発達が著しく食への関心が深まる為、小学生時期の食育は特に重要とされています。しかし、共働き世帯数増加等の社会環境の変化から家庭での食育が困難になっており、小学生に対し十分な食育を行うことができていません。そこで私たちは、ターゲットを「家庭で食育を行うことができていない小学生」、目的を「食育の見直し・改善」と定義し、家庭でできていない食育を地域の人々で支える『こめたんじゅく』を提案しました。「学ぶ・作る・食べる」の3点をコンセプトとし、小学生が食事までの過程を通して食への理解を深めていきます。この提案のポイントとしては、「継続性を持った食育塾」です。小学生が正しい食習慣・マナーを身に着けるためにはモチベーションを維持し継続的にサービスを利用してもらう必要があります。そこで効果的に教育を行える「ゲーミフィケーション」の要素を3つのコンセプトに導入しました。また、安全・低価格で利用できるよう、場所・食材・人材は地域の力を活かしたサービスを考案しました。

この取り組みを通して1番印象に残っていることは、『提案をゼロベースから考える難しさ』です。今までは既に設定された課題に提案を行う機会が多かった為、課題設定から提案を決定するまでに多くの時間を費やし、提案が決定するまでに5・6回新しい提案を練り直しました。4人で意見を共有し、アンケートや団体の方々に直接お話を聞いていくことで課題の本質を見抜き、「こめたんじゅく」の提案にたどり着くことができたと思います。その中でアイデア賞を頂くことができた事、大変嬉しく思います。

岡部教授をはじめ、応援して下さいった岡部ゼミ生の皆様、協力して下さいった団体・企業・地域の方々、このようなプレゼンの機会を設けて下さったプレコン関係者の方々に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

(文責：経済学科4年 中村耀)

指導教員(岡部先生)からのコメント

プレゼンターが体調不良のため急遽当日欠席という事態にもかかわらず、慌てることもなく何とか大きなミスもなしにやり切ったことは地力を感じさせる。本当にぶっつけ本番だった。これから先もこんなことはある。いい訓練になったと思う。今後もご健闘を!



ミャンマーの教育問題

木原ゼミ 教育班 磯部真由子、工藤瑛菜、酒寄静流、田中光、濱田和歌子、丸山あゆみ

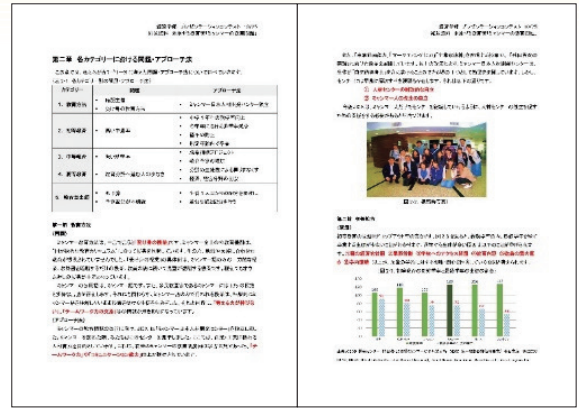
テーマ設定：ミャンマーの教育問題

木原ゼミでは毎年、開発途上国へ海外視察を行っています。私たち4年生は昨年、アジアのラストフロンティアとして知られるミャンマーを訪れました。それを踏まえ、今回のプレゼンテーションでは、「ミャンマーの教育問題」を取り上げています。ミャンマーには、人口の多いインド、中国そしてASEAN諸国が隣接しており、今後主要な貿易拠点の一つとして期待ができます。さらに、人口ピラミッドから生産年齢人口が増えていくことや、実質GDPが成長していることも分かり、潜在能力の高い国であると考えられます。一方で、ミャンマーには、インフラの未整備・民族間の問題・軍事政権時代の名残などといった解決すべき問題が数多く存在します。私たちは、これらの問題を解決するには、社会に対して問題意識を持ち、社会発展に寄与することのできる「人材を育成する」ことが有効ではないかと考え、テーマを設定しました。

分析・展開

今回私たちは「人材育成」に焦点を当て、教育問題を5つのカテゴリー(①教育方法②初等教育③中等教育④高等教育⑤教育支出額)に分けました。その中でも、③中等教育に関する問題を発表では取り上げました。中等教育を取り上げた理由は、中等教育就学率と1人当たりGNIには相関関係があり、さらに中等教育の改善が、労働力の増加に繋がる可能性があると考えたためです。ミャンマーにおける中等教育の課題は、就学率の低さです。初等教育は高い就学率を維持していますが、中等教育に入ると就学率が大幅に低下してしまいます。そこで、中等教育就学率に関係する要因を、ゼミで学んだ回帰分析を用いて探りました。分析結果から、中等就学率を上昇させるためには、教育予算額の拡大を行う必要があることがわかりました。さらに、中等教育へアクセスできない人々に向けては、現地で視察したADBの支援する職業訓練プロジェクトを強化することが効果的であると考えられます。

今回の発表にあたり、学生支援制度実行委員の方々から許可を頂いて、補足資料の配布をさせて頂きました。補足資料には、発表で取り上げることのできなかった、中等教育以外のカテゴリーの説明を記載しました。



補足資料の一部

プレゼンテーション・コンテストを終えて

今回のコンテストにおいては、本や論文から得た知識、海外視察で学んだこと、そして法政大学、成城大学と行った合同ゼミでアドバイス頂いたことを参考にして、発表させて頂きました。私たちは、ミャンマーの教育問題をマクロ的・ミクロ的の両視点から分析し、カテゴリーごとに分けて課題解決を考えました。進めていく中で、問題を徹底的に細部化し、それらの具体的な解決策を永続的に追求することが重要であると学びました。一方で、カテゴリーごとに浮かび上がった課題は、個々の問題として考えることが大変難しく、全ての問題には相関関係が存在するのではないかと思います。全体の問題を俯瞰的に見る力を養うことも、課題解決に欠くことのできない視点であると感じました。最後に、至らない点もありましたが、教育班で優秀賞を獲得することができ、大変嬉しく思います。的確なアドバイスを下さった木原先生を初め、ゼミの仲間や法政大学・成城大学の方々に、心から感謝申し上げます。

(文責：国際環境経済学科4年 酒寄静流)

指導教員(木原先生)からのコメント

学んだことや実力を如何なく発揮したプレゼンでした。この「学び」は今後の社会生活にきっと活かれます。優秀賞・ベストプレゼン、おめでとう!!

	定式1	定式2	定式3	定式4	定式5	定式6
定数	58.570*** (35.67)	87.835*** (20.55)	-128.273*** (-10.82)	28.106*** (4.82)	-183.548*** (-16.21)	-157.686*** (-7.28)
1人当たりGDP	0.000915*** (10.04)					-0.0000993 (-0.9)
教師1人当たりの生徒数		-0.976*** (-4.31)				0.346*** (2.73)
平均寿命			2.729*** (16.81)			2.739*** (9.48)
教育支出額/GDP				1.207*** (6.25)	3.516*** (21.85)	-0.569*** (-4.88)
自由度修正済み決定係数 R ²	0.002	0.21	0.81	0.366	0.9156	0.857
国数/サンプル数	8 / 67	8 / 67	8 / 67	7 / 67	8 / 119	7 / 67



被説明変数を中等教育就学率とした回帰分析の結果

過疎化とエコノミック・ガーデニング

高松ゼミ Team Timberland 戸張、小島、今市、町田、奥山

報告要旨

高松ゼミは地域活性化を研究テーマとし、昨年に引き続き埼玉県ふるさと支援隊に採択され、今年からは飯能市西吾野地区にて地域活性化活動をしています。

西吾野地区は飯能市の中山間地域に位置し、場所によっては上下水道も完備されていません。また、医療機関やスーパーなどの施設が年々減少し、自動車など足がなければ生活を送るのが困難な土地であるのが現状です。このような環境の中、若者の人数が減って行く一方で、高齢者の比率は増加していき、行く行くは限界集落となる可能性が懸念されています。そこで、私たち高松ゼミは、地元住民が相互に助け合うことで地域活性化を促すシステムとして「飯能エコノミック・ガーデニング」を提案します。一般に知られるエコノミック・ガーデニングとは、地元中小企業を育てることでその地域の経済活性化を図るという手法を指しますが、私たちは飯能市の中山間地域が抱える問題を真摯に受け止め、全く新しいアイデアの家事代行サービスのことで、住民同士の絆を高めると同時にサービス会員となり、有料チケットを用いて互いに助けを必要とする人のサポートという仕組みを着目しました。具体的には、自力で歩くことが困難な高齢者に代わって日用品の買い物を手伝ったりします。デイサービスや老人ホームの送迎前の身支度準備支援、子守や家の電球交換など、サービス(支援)内容は多岐にわたります。それは、また誰でも利用でき、どのようなことでも相談・依頼できるのです。

このサービスが地域に根付けば、高齢者はこれからの生活に不安を感じる事はなくなり、また、担い手となる若い世代も安心して暮らせると考えます。そして町から若い人が出ていくことがなくなれば、飯能市の過疎化を少しは緩和できると思います。

プレゼンテーション・コンテストを終えて

今年のゼミ活動では、上級生の手も借りながら2年生が主体となって、自分たち学生に何が出来るかを考え、企画・立案しました。しかし、実際に現地に赴いて住民の方と話しをしてみると、自分たちが授業や本で得た知識と、地元住民の方が抱える意識の間には予想外にギャップがあることに気づかされました。それを認識するなかで、飯能市が抱える問題について多くの人に知ってもらいたいと考えようになり、このプレゼンテーション・コンテストに応募しました。本選チームに選出されてから、限られた時間の中で、ときにはメンバー内で意見がぶつかり、話が思うようにまとまらないこともありましたが、

なで意見を出し合い議論を深めることができました。目の前の課題に全力で取り組み、多くの聴衆がいる前で発表できた事は、私たち自身を大きく成長させる貴重な経験だったと感じています。最後に、飯能の住民の皆様、このような発表の機会を設けてくださったプレゼンテーション・コンテストの関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

(文責:経済学科2年 町田安柚奈)

指導教員(高松先生)からのコメント

今年はゼミ活動の始まりが夏以降と遅く、これまでとは勝手が違いました。加えて、活動地域を変えたため、活動内容の再検討を余儀なくされ、手探り状態からのスタートでした。今回は、そのような苦しい時期を経てのプレコン発表となりました。しかし、いま振り返ってみると、プレコン出場が活動のモチベーションになっていたようです。また今回、エコノミック・ガーデニングを提案しましたが、それに対してこの分野の第一人者の山本尚史教授から激励メールが届くなど嬉しい出来事もあり、活動にさらに力が入りました。地域活性は難しいテーマであり、多くの人の手によって成し遂げられる大事業です。私たち高松ゼミの活動は、そのほんの些細な部分かもしれませんが、社会貢献の一翼を担っているという自負をもって、今後も学生の成長と共に邁進していきたいと思っております。



獨協大生が繋ぐ地域社会～大学×学生×草加で挑む減災プロジェクト～

高安ゼミ 減災かけはしチーム

震災リスクに晒される獨協生

高安ゼミでは開発経済学を学んでいます。私たち3年生8人はプロジェクト活動の初期段階で、自然災害が途上国に及ぼす被害やリスクに着目していました。震災大国日本で育ち、東日本大震災を経験したメンバーがいる私たちのチームが途上国のためにできることは必ずある。そう思い、活動に取り組みました。しかし、調査を進めるうちに、アジアの途上国よりも草加市が首都圏直下型大地震で受ける被害の方が深刻なことが判明したのです。

獨協生の安全と命を守る必要性に気付いた私たちは、まず300人を超える獨協生にアンケート調査を行い、震災に対する意識を調べました。その結果、学生は震災に対する危機感を強く抱いている一方で、減災を行動に移している人は少ないことがわかりました。次に、獨協大学の総務課と草加市役所の危機管理課にお話を伺ったところ、震災対策は行っているものの、大学と草加市の震災時の連携が必ずしも十分ではないことが明らかになりました。こうした背景から、獨協生は誰かに頼るのではなく、自身で行動する必要があるとの結論に辿り着きました。そして、私たちは獨協生が行動するための指針として「あなたとつくる減災マニュアル」を作成しました。この減災マニュアルは他大学の事例や東北大学の取り組み等を詳細に調査したうえで、震災を専門とする他大学の教授からアドバイスを頂きながら、獨協生に必要な情報を記載したものです。必ずや、あなたが震災から身を守る一助になると自負しています。

減災マニュアルを多くの学生に届けるには、獨協大学の協力が必要不可欠です。私たちは、大学に減災マニュアルの配布をはじめ、震災対策に関する提案を行っています。現状、獨協大学は大学としてのボランティア活動を認めておらず、震災時の地域との連携方法も定まっていません。大学が、私たちの活動や提案に耳を傾け、

詳細なプランを作成することで、学生、大学、草加市が連携した震災対策が可能になります。これにより草加市全体の減災を達成することが、私たちの最終目標です。

感想

私たちは本コンテストで、聴衆である獨協生、教職員の方々、そして地域の皆さんが少しでも震災の危機を感じ、考える機会を提供したいとの思いを込めて発表しました。それが届いたからこそ、最優秀賞という素晴らしい結果に繋がったと思っています。準備のために奔走した1ヶ月半、多くの困難をチームで乗り越えるかけがえのない経験を積むことができました。

総務課、草加市役所、社会福祉協議会、東北大学の諸先生方をはじめ減災マニュアルの作成に協力して下さった皆様、コンテストの運営に携わった方々、チームのメンバー、そして最後まで御指導して下さった高安健一先生にこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

(文責：国際環境経済学科3年 前田億)

指導教員(高安先生)からのコメント

3年生が新規に設定したテーマを、15分間のプレゼンで聴き手に伝える。この過程を通じて、今年も学生は意味のある教育効果を手にすることができた。

2011年3月の東日本大震災から6年以上が経過したにもかかわらず、獨協大学には学生を対象とした防災・減災の指針なりマニュアルは存在しない(2018年度に大学が作成する見込み)。現状に強い危機感を抱いた8人のプロジェクト・メンバー(恩田陽菜、植田美樹、笹野創太、鈴木芽実、前田億、野村陽香、初貝健太郎、小川美沙紀)が、減災に果敢に取り組んだ。メンバーは本大会出場と並行して、「あなたとつくる減災マニュアル2018」を作成した。本誌が読者に届くまでに、入手を希望する学生に配布されているはずである。首都圏直下型地震はいつか発生する。その際に、ゼミ生の成果物が減災、そして学生の命を守ることに貢献することを切望する。

学生は、社会的に意義のある取り組みを、経済的支援を受けることなしに推進している。大学、そして父母の会が、人間形成にもつながる学生の活動を積極的に、そして暖かい目で評価し、支援し、育むことを期待する。



経済学科高安健一ゼミナール 減災かけはしチーム

「保育園バンク」の創設 — 私たちのおカネを社会課題の解決に役立てるために —

徳永ゼミ 保育園に通わせ隊 中川千紘、河村ニコル、安孫子瑛基、後藤司、山田康平

本選までの経緯

徳永ゼミでは国際金融をテーマに活動しています。徳永先生は子育て真っ只中で、近年の待機児童問題についてよく話されます。そこで、ゼミで学んでいる金融の知識を活かして、待機児童問題を解決できないかと考えました。

プレコン参加に向けてのミーティングでは意見が食い違い、話が進まないときもありましたが、取材を通じて保育園運営の現状と待機児童問題の実態を知る過程で一つの解決案にたどり着きました。

内容

現在、子供を預ける保育園を探す活動に苦勞をしたと感じる親の割合が84%に及んでいます。母親たちは「施設がどこもいっぱい」「場所が希望と合わない」などといった不満の声を上げています。埼玉県でも、保育園に入りたくても入れない待機児童の数は現在1,258名にも及んでいます。

こういった待機児童の問題は、共働き世帯が増加することによる子どもを預けたいと考える女性の増加に伴って生じています。しかし、保育需要が増加するのに対して、保育士の低賃金や長時間労働の問題で保育士の数が増えています。そうした保育士不足が待機児童問題を引き起こしているのです。このことから、保育士の労働環境を改善し、数を増やすことで待機児童問題は解決するでしょう。

そのためには保育園の資金不足を解決する必要があり、保育園の資金不足を解決する仕組みとして私たちは「保育園バンク」を提案しました。保育園バンクとは保育園のための銀行です。保護者が銀行に預けているお金を、保育園バンクに移し替えてもらいます。その資金を元手に保育園に融資を行うことで保育園は規模の拡大を目指します。

保育園バンクでは2つのタイプの出資者を想定しています。1つは今まさに待機児童を抱えている家庭すなわち「預け隊」。もう1つは過去に待機児童を抱えていた家庭や、実際に経験したことはないものの、待機児童問題に対して強い当事者意識を抱いている家庭すなわち「助け隊」です。出資者には、保育園バンクが融資を行った認可保育園に子どもを入園しやすくなるなどの優遇措置や、待機児童問題解決という大きな社会的リターンを得ることができます。

私たちの計算によると、埼玉県の高校生以下の子どもを持つ家庭のうち、約1.2%が保育園バンクを利用すれば、埼玉県の待機児童問題は解決します。保育園バンクを創設することで、一人でも多くの待機児童が保育園に通うことのできる未来が訪れるでしょう。

感想

第5回経済学部プレゼンテーション・コンテストにおいて優秀賞を獲得することができ、大変嬉しいです。本大会を通して、チーム間の結束が深まったのは勿論のこと、他の参加チームと合同練習を交える

ことで、ゼミ間の交流・競争に拍車がかかり、大きな相乗効果が生まれたことは期待以上の収穫でした。経済学部には、このように学部生同士で切磋琢磨し合うことができる環境が醸成されつつあり、本大会が学生生活の道しるべとして私たちに与えた影響は計り知れないものでした。今回の発表を無事に終えることができたのは徳永先生やゼミ生たち、取材に応じてくださった皆様方のご協力のおかげです。最後に、来年度のプレゼンテーション・コンテストでは今年度の教訓、反省点を踏まえて、最優秀賞を目指して日々のゼミ生活に邁進していきます。



指導教員(徳永先生)からのコメント

今回のプレコン参加は、リーダーである中川さんの「ゼミで何かをやり遂げたい」という強い気持ちと河村さんのチャレンジ精神からすべてが始まりました。一度は参加を諦めかけましたが、2年生の3人の参加が大きな起爆剤となり、本戦初出場ながら優秀賞を勝ち取ることができました。彼らが今回のプレコン参加で得たものは想像以上のものでしょう。それをともに共有できたことは、私の教員人生にとってかけがえのない経験となりました。

ものづくりを通して見えたもの

堀江ゼミ HorieLab 市村拓登

身近な課題が生み出すアイデア

時にアイデアは思いもよらない所から降りてきます。このプロジェクトも私の友人が放った「野菜がうまく育たない」という一言から始まりました。彼の悩みはとても何気ないものですが、その分同じ悩みを抱えている人も多いのではないかと思います、課題解決に取り組む事を決意しました。

まず、その課題を受けて私たちが導き出した答えはITの力を活用することでした。プログラミングを用いて研究を行っている私たちにとってこれはとても自然なアイデアで、その中でも最近熱を持ち始めたIoTの技術を応用することで、現代にフィットした新たな野菜栽培体験を描くことができるのではないかと考えました。

コミュニケーションがカギ

農業IoTデバイスを開発するとは言ったものの、IoT開発の経験は乏しく、本格的には今回がはじめてのチャレンジとなりました。企画書を書いた時点で、必要な材料や大体の要件定義は済んでいたものの、作業の分担や時間的制約など懸念材料は少なくはなく、特に夏休み期間での活動が大部分を占めていたことから、顔を合わせて作業をする時間を十分に設けることができないことが大きな問題となっていました。

これらの問題を解決するために、HorieLabでは、ビジネス向けチャットツールである「Slack」を活用しました。このツールは書類共有機能に優れ、プロジェクトの役割ごとに部屋を設ける機能があることで、会議を行う度に増える議事録や書き上げたプログラムのレビューなどのテキストベースのコミュニケーションを極めて少ないストレスで行うことを実現しました。もちろん、実際に会って顔を見ながら話をすることはとても重要ですが、限られた時間、リソースの中でより良いコミュニケーション環境を作り出す事も重要です。

名前をつけることの意味

このプロジェクトで開発したプロダクトの名前は企画書を提出した段階では決まっておらず、ある程度プロジェクト進んだ段階で「生活」と「野菜」を繋げるというコンセプトを元にVegeLifeと決めました。実際、名前を付けたことによる変化はとても大きなものでした。それまで名前のない状態で教授や社会人の方にプロダクトを紹介していましたが、名前を付けたことにより、コンセプトが伝わりやすくなり、原理や機能などの詳細情報もスムーズに伝わるようになりました。プロダクトに名前をつけることは、プロダクトに命を吹き込み、それを概念からモノに変えるひとつの重要なプロセスなのかもしれません。



頼り合いでチームが成り立つ

今回のプロジェクトを通してチーム開発における「頼り合い」の大切さを知ることができました。複数人でもものづくりをする上で分業は大きな課題となり、知識や技術が少ないメンバーに依存した場合、作業バランスが崩れてしまう事は容易にあります。今回もチームの基盤が固まるまでに多くの時間を費やしましたが、最終的にそのチームの分業を確立させたのはメンバーの「ここは私に任せて」という言葉でした。誰がどの作業でパフォーマンスを出せるかはプロジェクトリーダーの感覚だけでは分からず、メンバーそれぞれの意思によって大きく左右されるのです。

今回のものづくりで多くのことを学ぶ事ができました。その中でも、チームだからこそ起こる予想外の事態や化学反応の素晴らしさに気付けたことは私にとってとても重要な財産となりました。

プロジェクトメンバーからの感想

鈴木晴奈: 私は今まで、約半年間もグループで活動したことがなかったため、今回のコンテストでは会議で積極的に発言することを心がけました。その結果、今まで以上に自分の意見をしっかりと発言することができるようになりました。今回のコンテストでの経験を踏まえて次の活動につなげていきたいです。

増田早希: 私は、IoT×農業の研究に興味があつて参加しました。研究をしていて難しいと感じたことは、参入障壁を低くするために「どの様な機能があつたらよいか」「こんなデバイスがあつたらよい」など話し合つてできたアイデアを『実際に形にする』ということです。短い時間の中で、自分たちで考えたアイデアを形にする事の難しさ、大変さを学びました。デバイスに関する知識がなく、一から勉強が必要だったことと朝から集まるのは大変でしたが、ゼミ生との仲も深まったので参加してよかったです。

(文責:経営学科3年 市村拓登)

指導教員(堀江先生)からのコメント

堀江ゼミはコンピュータを用いた理論や技術を学び、アプリや動画などを作成するゼミである。経済学部では異質なこともあり、プレゼンテーションコンテストへの出場は大変難しいものがある。その中で、堀江ゼミから3年ぶりにプレゼンコンテストに出場者が出たことを大変嬉しく思う。

彼ら7人は、テーマ決めから作成まで一致団結し、時には、ゼミの仲間の協力を得たり、卒業した先輩などの意見を聞いたりしながら一所懸命にプロジェクトを進めた。本選では惜しくも入賞を逃したのが、得られたものは大きかったのではないかと思います。他の先生方からも今後の継続を希望する声を頂いた。是非、今後もゼミ全体で協力し、このプロジェクトが更なる発展を遂げることを期待している。

学内プレゼンテーションコンテストへの軌跡

山森ゼミ Aチーム 鈴木滉崇、田中有寿人、野澤知世、茂木啓司、小林竜二

経済学部プレゼンテーションコンテストに参加したきっかけは、12月初めに開催される学外プレゼンテーション大会に向けた一つの大きな通過点として先生が勧めてくださったことです。自分たちの研究をより良いものにしたいという思いで参加を決意し、「公共インフラ投資と維持管理」をテーマに研究を始めました。

現状分析を進めるなかで道路インフラの維持管理費用が将来不足するという問題点を見つけ、その不足分を補う何か新しい財源はないかという観点から“走行距離課税制度の導入”について検討しました。この制度は、自動車の走行距離に対して課税するというものです。道路整備に必要な費用や自動車の重量などを考慮し、1kmの走行毎に徴収する税率を設定します。この税率を求める式を算出するまで、ほぼ毎日集まり試行錯誤を繰り返しました。たくさんの困難に直面しましたが、それを乗り越えることができたのは、グループワークを円滑に進めることができたからだと思います。私たちは普段から疑問に思ったことや理解ができなかったことを口に出して意見交換をするようにしています。それが原因で進行が遅くなることもありましたが、問題意識や達成目標をメンバー全員で常に共有しながら研究を進めることができました。

また、私たちはコンテストの前に合同ゼミ練習会にも参加しました。この練習会は、お互いのプレゼンテーションをより良くしていこうという思いから先生方が開催してくださったものです。ゼミの先輩がいない新設ゼミの私たちにとって、他のゼミの先輩方や先生方にご指導して頂いた合同ゼミ練習会はとても有意義なものでした。

コンテストでは“経済学部長奨励賞”を受賞することができました。優秀賞・最優秀賞を取ることはできませんでしたが、このコンテストをとおして私たちは賞よりも大切なものを沢山得ることができました。ご指導してくださった山森先生、大床先生、高安先生、そして、高安ゼミ、徳永ゼミの先輩方に心から感謝しています。この結果に満足することなく、12月に開催される大会に向け、より実現可能性の高い政策が提言できるよう研究を続けていく所存です。

(文責：国際環境経済学科2年 鈴木滉崇)

指導教員(山森先生)からのコメント

ゼミ生たちが出場を目指した公共選択学会「学生の集い」では研究テーマが予め与えられています。今年度のテーマは「公共インフラ投資と今後の維持管理をどうすべきか」でした。参加するすべてのチームが同じテーマで研究を進めるため、独自性を出すのは容易なことではありません。

Aチームが目じたのは、道路インフラの維持管理に必要な財源確保の問題でした。この問題自体は特に目新しいものではありませんが、まだ導入実績がほとんどなく、先行研究も少ない「走行距離課税」に着目したことは特筆すべき点といえるでしょう。課税による走行距離の減少をガソリン需要の価格弾力性から推計したうえで、必要な財源を確保するための税率を計算するという、2年生にとっては大変難しい課題も彼らは見事に遂行してくれました。残念ながら「学生の集い」では入賞を逃しましたが、彼らの努力がプレコンで「経済学部長奨励賞」という形で報われたことは、指導教員として大変嬉しく思います。

最後に、プレゼンやスライド作成の技術について指導してくれた高安ゼミの皆さん、多くの有益なコメントをいただいた大床先生と高安先生に、この場をお借りしてゼミ生とともに心より感謝を申し上げます。



聴衆の皆さんに届けようという思いを持って 木原ゼミ 国際環境経済学科4年 磯部真由子

この度、第5回経済学部プレゼンテーション・コンテストにおいて、ベストプレゼンター賞を受賞できたことをとても光栄に思っています。この場をお借りして、指導して下さった方々、コンテストの運営に携わって下さった皆様、そして会場でプレゼンを聴いて下さった皆様に心より感謝申し上げます。

木原ゼミでは、開発経済学を専攻し、開発途上国の現状や、支援の状況、その国の今後の在り方について学んでいます。2016年9月、私たちはミャンマーへ海外視察に行きました。ミャンマーでは、様々な開発プロジェクトを見学しましたが、その中でも私は、教育支援についてとても関心を持ちました。帰国後、ミャンマーの教育の現状や、行われている支援などについてもっと深く知りたいと思い、研究を始めました。

今回のコンテストでは、「ミャンマーの教育問題」について取り上げました。本や論文から得た知識、海外視察で実際に見聞したこと、そして法政大学、成城大学と合同で行った共同発表会でアドバイスを頂いたことを参考にしてプレゼンを作成しました。

ゼミ活動で行ってきた研究の成果をあのよう

素晴らしい舞台上で発表することができ、とても光栄でした。コンテスト当日は発表順が1番最後だったということもあり、いつも以上に明るく、聴衆の皆さんにわかりやすく伝えようという気持ちを胸に舞台上に立ちました。発表は今までで一番良かったと胸を張って言えるものでした。結果的に、木原ゼミでは優秀賞を、そして個人的にはベストプレゼンター賞を受賞することができ、とても嬉しく思っております。このような貴重な経験ができたことは、私の大学生活において、忘れられない大切な思い出になりました。今回の経験を糧に、今後も研究を続けていきたいです。最後に、今まで教育班として一緒に研究を行ってきたメンバーのみんな、そして木原先生、本当にありがとうございました。



ADB人材開発プロジェクト視察時の様子



プレゼンテーション・コンテスト授賞式の様子

伝えるプレゼン、伝わるプレゼン

高安ゼミ 経営学科3年 初貝健太郎

この度、本コンテストにおいてベストプレゼンター賞を頂くことができたことを光栄に思います。この場をお借りして、私たちのプロジェクトを支援して下さった皆様、ご指導をいただいた方々、そして大会運営関係者に心からお礼申し上げます。

私たちのプロジェクトのテーマは減災。舞台は私たちが生活する草加市。プロジェクト・メンバーは、減災活動の当事者である獨協生と教職員に直接伝える場として、本コンテストに出場することに決めました。プレゼンを組み立てるにあたり特に気をつけたのが、聞き手の存在です。15分という限られた時間の中での自分の役割は、最後のスピーカーとしてチームの想いを伝え、聞き手に行動を促すこと。そのためどのような説明や言葉遣いが適切で、どのような話し方が効果的なのか、常に聞き手の意識を念頭にプレゼンを組み立てました。例えば、初めて聞く人でも自分たちのプロジェクトを理解できるように、専門用語はできるだけ避けわかりやすい表現にしました。内容と話し方を照らし合わせながら、強調すべき箇所、目線、身振り、手振り、動き、話し方などの全てを、伝わることを目的に駆使しました。

本番に向けて幾重もの壁がありました、「何としてでもやりきる」一心でプロジェクトに邁進しました。伝えることの難しさを体感すると共に、試行錯誤しながらも伝わった時の喜びを感じることができました。

私たちのプレゼンは、プロジェクトを通して交流を深めた学外の方々、ゼミの同期や先輩、他ゼミの学生、教職員等々、数え切れない方々による協力とご指導なしに完成させることはできませんでした。今回の貴重な経験をこれからの学生生活や卒業後に生かしていこうと思います。ありがとうございました。





経済学科教授 高安 健一

多くの方々に支えられ2017年のゼミ活動を無事に終えることができました。本年度も宜しくお願い致します。

📍 イベント、📄 論文・制作物、🗣️ 報告会・大会等、
📺 外部メディア掲載、📄 詳細情報掲載先

📍 2017年1月28日：歓送迎会（全学年）

卒業研究論文集授与

🗣️ 2月21日：チーム2020

草加市役所スポーツ振興課で発表「2020年東京パラリンピック事前合宿誘致に向けた提案～獨協大学、草加市、市民が連携して創る『快適都市』～」宮本夏実、関津津美等

📍 2月26日：東京マラソン2017

フィニッシャー：山田拓

📍 3月21-24日：2年生春合宿

千葉県御宿「サヤンテラス」

📄 3月31日：『留学生と地域を結ぶハンドブック』刊行

齋木希（編集長）、太田稜眞、恩田陽菜、久保令花、堤羽香奈、中本早靖芳、初貝健太郎、矢吹徳浩、山本晃規、渡邊健太

📄 大学HP「ニュース」4月11日

📺 4月17日：『東武よみうり新聞』

「留学生ハンドブック」についてのインタビュー記事掲載

📺 4月20日：『東武新聞』

「留学生ハンドブック」紹介記事掲載

📺 5月3日：『日本経済新聞』

MOPチーム作成の「カBan」について

🗣️ 5月13日：参加型開発チーム（4年）

日本NPO学会・学生セッションで、2016年度獨協大学学生懸賞論文優秀賞論文をもとに発表。太田稜眞、矢吹徳浩、中村郁巳、天田麻友、高橋莉真、二俣将

📄 大学HP「ニュース」5月19日

📄 『獨協大学ニュース』2017年7月号

📍 6月13日：OB・OG会開催

🗣️ 9月5日：チーム関東女子

JTBなどが主催する「大学生観光まちづくりコンテスト2017北陸ステージ」で北陸経済連合会賞（準優勝）とパフォーマンス賞獲得。テーマ「まちこい～私たちの第二の故郷はあなたの誇れるまち～」篠田恵里花、岡田彩奈、齊藤実里、佐藤彩花、田中真実

📄 日経カレッジカフェ：<http://college.nikkei.co.jp/article/103505511.html>

📄 大学HP「ニュース」9月12日

📄 『獨協大学ニュース』11月号

📺 9月12日：『読売新聞』朝刊

宮本夏実の就活紹介記事掲載

📍 9月12日-15日：夏合宿

2年生、3年生、4年生（任意参加）、新潟県南魚沼市「むいか温泉ホテル」



🗣️ 9月30日-10月1日：参加型開発チーム

グローバルフェスタJAPAN2017に出展。来場者約12万人

📄 大学HP「ニュース」11月9日

🗣️ 10月7日：食育チーム

日本学生経済ゼミナール関東部会（インナー大会）出場。テーマ「タイに健康経営を届ける～健康でつくるタイと日本の明るい未来～」。高根一樹、久保令花、堤羽香奈、中本早靖芳、吉野美智子



🗣️ 10月14日：父母の会全大会で就活報告

太田稜眞

🗣️ 10月15-29日：参加型開発チーム

JICA 地球ひろば2階展示スペース出展

テーマ「ダンスと歌で、石鹸を使った手洗いの知識と習慣を広げる！～学生6人がインド・ビハール州の学校で授業に奮闘～」

📄 『JICA 地球ひろば』→「展示・イベント情報」→「過去の展示情報」

🗣️ 10月25日：減災かけはしチーム

経済学部プレゼンテーション・コンテストで最優秀賞とベストプレゼンター賞（初貝）獲得。テーマ「獨協大生が繋ぐ地域社会～大学×学生×草加で挑む減災プロジェクト～」前田億、初貝健太郎、笹野創太、野村陽香、恩田陽菜、植田美樹、小川美沙紀、鈴木芽実

📄 詳細は本誌プレコン特集

🗣️ 10月27日：参加型開発チーム

JICA 地球ひろばで報告会開催

📄 『JICA 地球ひろば』→「展示・イベント情報」→「過去の展示情報」

📄 大学HP「ニュース」11月9日

🗣️ 11月3日：雄飛祭にて第5回国際開発シンポジウム開催

テーマ「学生と国際NGOのコラボの可能性を探る」

国際協力NGOジョイセフの山本篤氏による基調講演と3年生プロジェクトチームの発表（LGBTQチーム、食育チーム、減災かけはしチーム、チーム関東女子）。模擬店売上（バナナ春巻き5万299円）、チャリティー・ピンキーリングなどの売上7万1,000円、募金額4,511円の総額12万5,810円をジョイセフへ寄付。ご協力有り難うございました。

🗣️ 11月7日：LGBTQチーム

獨協埼玉中学高等学校で高校1年生約360人に授業「LGBTQと多様性」山本晃規、瀬田優、田中綾音、田中優伽、富山由起乃、平田真菜

📄 大学HP「ニュース」11月30日

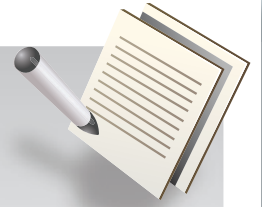
🗣️ 2018年1月15日：減災かけはしチーム

「あなたとつくる減災マニュアル2018」完成

🗣️ 2月15日：LGBTQチーム

「LGBTQハンドブック」完成

📍 國井仁：アフリカでのインターンシップ（2017年6月～）



経済学科教授 全 載 旭

私の所属する全載旭ゼミでは、毎年10月に慶應義塾大学経済学部の駒形ゼミと合同で「インターゼミナール(通称:インゼミ)」と呼ばれる合同ゼミを開催しています。各校の三年生が、「中国」というキーワードのもと、テーマを設定し、それぞれ一つの論文を仕上げます。今回は、このインゼミを経て得たものを、全ゼミの特徴を踏まえながら述べていきます。

筋道を立てて論を展開するという事

全ゼミでは東アジアの中でも特に中国に焦点を当て、中国経済についてマクロ的な視点から研究をしています。普段の活動では、毎週学生が決めた参考図書やレジュメにまとめ、パワーポイントなどを準備して発表し、質疑応答の後、グループごとに議論をしています。その際に我々が最も意識していることは、「論理性」、すなわち筋の通った発表、質問、応答、議論ができていくかどうかにあります。

発表者は約40名のゼミ生全員の前で発表をするため、知識だけでなく人前で論理的に発表を展開していくことが求められます。また発表を聞くゼミ生たちも、論展開の中に矛盾はないか、発表者たちが間違えた方向で論を進めていないか、自分の獲得してきた知識と照らし合わせながら質問を投げかけていきます。また、グループディスカッションの際には、発表者の提示する議題に対してどのように展開をすると論理的な議論ができるかを考えながら取り組んでいます。毎回の活動では以上のような点に注意しながら、先生のご指導を頂きつつ2年次から「論理的に考える力」を養っていきます。

こうした活動を通じて、私自身、質のいい論文とは何かを明確に自分自身の中で見分ける能力が付き、筋の通った論文を執筆することができるようになりました。

コミュニケーション能力の向上

また、全ゼミでは2、3、4年生が合同でゼミ活動をしています。それにより先生や先輩への接し方、言葉遣い、配慮の仕方などを学ぶことができます。また3年になって後輩という存在を持つからは、彼らの理解度に合わせて不足した知識を補ったり、能力に応じて仕事を割り振るなど、一人ひとりの個性に向き合うということも学んでいます。このような経験を通して、ゼミという小さなコミュニティの中でもコミュニケーション能力の向上を実感しています。

一丸となって乗り越えたインゼミ

こうしたゼミでの経験の中で集大成ともいえる活動が、慶應義塾大学駒形ゼミとの合同研究会「インターゼミナール」です。

今回、我々がインゼミで設定したキーワードは「製造業における中国の産業競争力」です。昨年度の本校のインゼミ論文で使用した貿易統計「付加価値貿易統計:TiVA」を使用し、「東アジアの国際分業構造と中国の産業競争力~付加価値貿易統計から見る分析~」について3年生で共同論文を執筆しました。

今回の執筆過程においては、知識の面では大差はなかったのですが、ひとりひとり得意とする分野が異なり、統計データをもとにエクセルを使用してデータ分析をするのが得意なメンバー、そのデータを文章に起こし、論展開するのが得意なメンバー、出来上がった論文を要約し、パワーポイントに起こすのが得意なメンバーなど、それぞれの得意不得意を意識した役割分担を決定するまで、大変苦労しました。これらの作業は同時に進行できるものではないので、特に私自身データ作成の際には躓くことが多く、足を引っ張っていると感ずることも多くありました。

そんなとき、1期上の先輩に「もし自分の存在価値を見いだせないなら、同期の1.5倍努力しなさい」との助言をもらい、それまで自分の中でないがしろにしていた「既存の論文、研究の精査」という点に力をいれ、またあまり論文執筆に参加できていなかったメンバーたちにも積極的に声をかけ、全員で論文に向き合う体制を作り上げることができました。インゼミ当日は両校白熱した議論が飛び交い、大変有意義な時間を過ごすことができました。この経験を通して、わたしは、一人ひとりにしっかりと向き合いそれぞれが得意とすることは何なのかを見極めることで初めて「協働」することができるということ学びました。

約2年のゼミ活動を通じて、論理性や知識はもちろんのこと、先輩後輩との人間関係、コミュニケーション能力、かけがえのない同期との絆を得ることができ、この上なく充実した大学生活を送ることができました。ここで得た貴重な経験を糧に、残り1年のゼミ活動を一つ一つ大切に過ごしていきたいです。

国際環境経済学科3年 大久保 智尋





経済学科准教授 徳永 潤二

私たち徳永ゼミは銀行業務から世界経済、AIに至るまで様々なテーマで共同研究を行ってきました。

1. 中国経済の行方

経済学科3年 宇賀神友優

近年、中国の経済発展が目覚しく、中国人による爆買いや豪華旅行は日本のメディアなどでも多く取り上げられていました。しかし一方では「中国経済は崩壊する」、「中国の経済衰退は近い」などといった記事も多くみられます。以上のことを踏まえて、隣国にある大国がどのような発展を遂げ、今後どのように動くのかをテーマに研究を進めてきました。

今回の研究にあたり、特に力を入れたことが洋書を用いたことです。「THE CHINA BOOM」という本で、翻訳作業を行いながら研究を進めて行かなければならなかったのは大変でしたが、中国経済を研究しつつ英語読解力と経済英語のスキルも強化してくれる貴重な時間となりました。

中国の発展には4つの大きな基盤が存在しています。それは①国営企業②過剰剰労働力③輸出業④East Asian Tigerです。これらの基盤が中国の経済発展に大きく関わっています。しかし、中国経済の先行きは希望に満ちているという訳では無く、大きな問題をいくつも抱えています。その中でも都市部の発達と地方の衰退・住宅バブルの崩壊・GDP成長の低下・膨大な不良債権(約2200兆円)などが主な問題として挙げられます。これらの点を考慮した結果、中国経済は今すぐに崩壊するという確率は低いが遠くない将来には崩壊が始まるのではないかと結論に至りました。今後も中国経済の動きに目を向けていきたいと思います。

2. AIは私たちの生活をどのように変えるのか

国際環境経済学科3年 斎藤 直道

本論文では、国内外を問わず注目され、活用が進んでいるAI(人工知能)をテーマとし、私たちの働き方や金融、日本経済にどのような影響を与えているかについて研究しました。また、金融という部分ではAIと同時に「FinTech」という技術に触れています。本論文を作成するにあたり参考文献の読み込みに加えて、現役大学生へのアンケートを行いました。このアンケートによってAIが一般にどれだけ認知されているかが分かり、重要な材料の一つとして活用することが出来ました。第1章では、AIについての基本情報を述べ、AIによって私たちの仕事が今後どのように変

化するかをアンケートの結果も用いながら論じました。第2章では、AI、IT技術導入の動きが著しい金融機関を取り上げ、AI技術が大いに活用されている「ロボアドバイザー」とFinTechで重要視されている技術である「ブロックチェーン」を中心に取り上げました。これらの技術の躍進による、銀行支店数や利用回数の実情をまとめ、今後の銀行の必要性を言及しました。第3章では、AIの問題点として「安全性・実現・労働」の3つを挙げ、これら3つの問題点が、個人・日本経済にどのような影響があるか論じました。そこで挙げた影響としては、①雇用の一部代替、②雇用に補完、③生産競争への直結による雇用の維持・拡大、④女性・高齢者の就業関係の改善の四点を挙げました。おわりに、AIの認知度拡大と実生活におけるAI活用の早期実現を今後の研究課題として挙げました。製作者の私たちを含め様々な人が今まで以上にメディアなどを利用して情報発信を行い、世間との大きな認識の差を少なくすることで実生活におけるAI活用の早期実現に繋がることを期待します。

【2017年度 徳永ゼミ 論文コンテスト エントリー論文】

- ・宇賀神友優 「中国経済の躍進と崩壊」
- ・大谷友哉・斎藤直道 「AIは私たちの働き方をどのように変えるか」
- ・菊池純 「アメリカの政治・経済の行方」
- ・佐藤早希・渡邊侑果 「中国経済の行方」
- ・中川千紘・河村ニコル 『『保育園バンク』』の創設-私たちのおカネを社会課題の解決に役立てるために-
- ・古田唯 「暗号通貨の誕生」





経済学科教授 森永 卓郎

森永ゼミでは、毎年夏休みの最後に、プレゼンテーション能力向上を目指したゼミ合宿を行っています。今年は、9月16日から18日の2泊3日で、千葉県の白子ニューシーサイドホテルで行いました。ちょうど台風が直撃し、バーベキューが中止に追い込まれるなど、アクシデントも発生しましたが、往復の時間帯は台風の直撃が避けられたため、全員無事に戻ることができました。

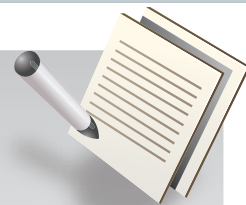
ゼミ合宿では、総合得点で優勝者を2年生、3年生のなかから決めているのですが、例年3年生が優勝しています。ただ、今年は2年生の遠藤大士君が優勝しました。彼は、その後に行われたゼミ長選挙で、ゼミ長にも選ばれました。ちなみに副ゼミ長には、境朋晃君、細沼優花さんの両名が選ばれました。

ゼミ合宿で行ったトレーニングは以下の通りです。

- ①例え話30秒
- ②ディベート
- ③プレゼン15分
- ④モノボケ10～15周
- ⑤ショートコント3分
- ⑥3単語1分
- ⑦つまらない王決定戦 10～15周
- ⑧すべらない話1分 移動30秒
- ⑨ドボンクイズ



モノボケをする戸塚美沙子さん



経済学科准教授 山森 哲雄

今年度開講した私のゼミには2年生11名が所属しています。メンバーが確定するまで時間を要したため、本格的なゼミ活動を開始したのは4月の下旬からでしたが、ゼミ生たちの学習意欲は高く、また、課外活動にも積極的であったことから、1年目から大変充実したゼミ活動を行うことができました。

演習I

演習Iでは、私が担当する「行動経済学a」の授業内容をもとに標準的な経済学における合理的選択の考え方について学習するとともに、イチャーク・ギルボア著『意思決定理論入門』（NTT出版）を輪読し、ヒューリスティックと合理性の関係について理解を深めました。学生同士のディスカッションをとおして、課題を自ら発見する能力を向上させることができましたと思います。

グループ研究

12月に開催される公共選択学会「学生の集い」に出場することを目標に、AとBの2グループに分かれてグループ研究を進めました。「学生の集い」は2年生と3年生の部に分かれており、それぞれ別のテーマが毎年与えられます。今年の2年生のテーマは「公共インフラ投資と今後の維持管理をどうするべきか」です。Aグループは道路インフラの老朽化対策が遅れている現状を踏まえ、道路整備費用の財源を走行距離課税の導入によって確保することの是非について検討を進めることになりました。また、Bグループは、全国の市町村で水道事業の存続が危ぶまれている現状に注目し、事業の広域化とPFI方式の導入の有効性について検証することを課題としました。9月に行った1泊2日の合宿では、各グループの論題解釈について詳細を詰めるとともに、今後の研究の進め方などについて議論しました。



夏合宿 Aグループのディスカッション風景



夏合宿 Bグループのディスカッション風景



夏合宿 ホテル前にて

プレゼンテーション・コンテスト

10月に開催された経済学部プレゼンテーション・コンテストに挑戦し、Aグループが経済学部長奨励賞を受賞しました。「学生の集い」の予行練習として、大勢の聴衆を前にしたプレゼンに慣れておくことが当初の目的でしたが、大会前の合同練習会などで他ゼミのチームと切磋琢磨することにより、プレゼンやスライド作成の技術そのものを向上させることができましたようです。



経済学部プレゼンテーション・コンテスト

公共選択学会「学生の集い」@東洋大学

今年の「学生の集い」2年生の部には、8大学17チームが参加しました。プレゼン審査と論文審査を経て、そのなかから最優秀賞1チームが選出されます。残念ながら最優秀賞は逃しましたが、Aグループが総合2位の成績を取めました。



学生の集い Bグループの報告

きめ細かいとは言えない私の指導にもかかわらず、1期生たちが期待以上の成績を取ってくれたことを大変うれしく思います。

紅白プレゼン合戦 4カ月の軌跡
～三越伊勢丹マーケティング戦略立案～

経営学科教授 有吉 秀樹

10月27日(金)夕刻、都内某所。6名のMBAホルダー、有吉先生、ゼミOBOG、全学年のゼミ生、総勢43名が一堂に介した。3回目を迎えるMBAホルダーを前にしたプレゼンの幕開けである。今回の課題は三越伊勢丹。ファストファッションが台頭し、クリック1つでモノが買えるこのご時世にあつて、百貨店の存在意義はあるのだろうか。危機感を抱いた2社はトップ同士が同じ高校出身ということもあり合併に動いた。外商という厚い顧客基盤を持つ三越とバイヤーの目利き力で鳴らしてきた伊勢丹、合併すれば怖いものなど無いはずの2社が統合効果を実感できずに苦しんでいる。戦略が迷走する中、2017年3月には電撃的な社長解任。この難しい問いに対し有吉ゼミの学生がどのような答えを出すのか、ゲストたちの注目が集まった。

ピリッとした空気の中、自らを紅組と名乗る1班目のプレゼンテーションが始まる。20分強という時間を長く感じさせない堂々たるプレゼンは形式、内容の両面で優れたものだった。それでも相手は経営戦略のスペシャリスト。四方から思いがけない鋭い質問が飛び交い、息つく暇もない。問題提起の答えは納得いくものか、今後百貨店は生き残るのか、自分たちの戦略が社会という現実におかれた時、どう映るのかを知った。

熱のこもった議論の中、誰かが時計を気にしだす。気がつけば、プログラム終了予定時刻間近。慌てて口頭発表を始める白組に対し、無情にもプレゼン終了が言い渡される。この予想外の短さの裏には、もちろん時間が押していたこともあったが、それだけではなかった。彼らはこの日に課題を間に合わせることはできなかったのだ。「君たちは今日良い経験をした。半分までしかできなかったというのは50点ではない。0点なんだ。君たちは今日0点を取った。今のうちにこういう経験ができるのは良いことじゃないか」この厳しくも暖かい言葉を胸に更なる成長を遂げることを期待したい。

この課題に取り組み始めたのは、本番から遡ること約4か月前である。ゼミの最初の学年である2年生は、それまでに2つの課題に取り組んできたが、長期的な課題はこれが初めて。2年生の集

大成とも言える課題だ。彼らの取り組みがゼミ全体の成長にも繋がるため、3、4年生も自分の課題のように後輩の指導にあたった。ゼミ生の多くは百貨店にほとんど行くことのない非消費者。書籍で2社の歴史や経営者の考え方に思いを馳せ、店舗見学で顧客の行動の裏に隠された心理を探り、その間何度も壁にぶつかっては班内で衝突も生まれた。

この課題に取り組む上で何よりも恵まれていたのは、三越伊勢丹に深く精通するお二方にインタビューを受けていただけたことだ。まず7月と8月の計2回、構造改革推進部 企画担当の中島一樹様にお話しを伺った。2年生が社会人にインタビューする機会には中島様が初めて。確かめたいことがある一方で、いかにして質問すればよいのか、不得手な学生たちに対して意図を二重にも三重にも汲んで答えてくださったことに感謝したい。次に9月、元会長で現在は特別顧問、さらに経団連副会長も務められている石塚邦雄様にお話しを伺った。本社会議室にて2時間という異例の長時間のインタビュー。質問者の学生の名前を控え、書物のコピーなどを準備して臨んでくださったことにゼミ生一同敬服した。書物やTV等の画面上でしか目にする事がなかった石塚様を前にして、質問者は緊張の色が隠せなかったであろう。しかし、岡田事件^{*}から合併の裏側まで、まさに三越伊勢丹の歴史そのものである石塚様の発言はその1つ1つが重く、この経験は将来にわたって忘れがたいものとなった。

最後にこのプロジェクト全体をアレンジしてくださった有吉先生をはじめとして、インタビューからプレゼンに至るまでお世話になったすべての方々に感謝の意を表したい。

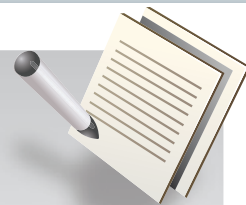
(文責:経営学科3年 西村里奈)

^{*}1982年に三越を舞台にして起きた事件。当時のワンマン社長岡田茂が愛人竹久みちの経営するジュエリーショップに不当に利益を供与していた問題などが発覚し、特別背任罪で逮捕・訴追に至った事件。役員全員による電撃的な解任劇が世間の話題を呼んだ。



インタビュー後、特別顧問の石塚様(最前列右)を囲んで

大塚家具で役員を前にプレゼン



経営学科教授 岡部 康弘

12月14日、大塚家具本社で役員らを前に大塚家具の改善策に関してプレゼンをした。以下はその様子である。

大塚家具には、新しい接客スタイルになったことで強みである接客が活かしていないという問題点がありました。その強みを活かすために、従来の接客との違いを理論を用いて可視化する必要性を説きました。

方法としては、顧客や従業員の行動プロセスをITツールを用いて分析する方法、またこのITツールを大塚家具の既存のサービスシステムへ応用を効かせることにより、接客サービスの改善や応用を図る方法を提案しました。

大塚家具の方々に頂いたフィードバックについては、接客の中で人対人を重視している自社に、とても役立つ提案です。アナログな部分も残しつつ、この提案を取り入れてみるのも面白いかもしれないといったご意見を頂きました。

(文責：澤田一馬)

家具市場の成熟化に伴い顧客のニーズが多様化してきたことによって、顧客個人の趣向に合わせた家具を提供することが重要となってきている。それに対して大塚家具はカスタマイズやオーダーのサービスを提供しているが、コストプラスの価格設定であるため値が張る。

そこで今回私たちは、各サプライヤーと協力し柔軟なサプライチェーンの構築により、顧客の製品設計に合わせた家具を提供すると同時に低コスト化を図るとい、マスカスタマイゼーションを提案した。

大塚家具からはカスタマイズと価格設定の重要性は理解しているが、各メーカーとの調整が最も難しいとのフィードバックを頂いた。

(文責：小原創太)

今回私達は購入ではない、新しい家具の買い方を考えた。新生活を開始する際に生まれる家具のまとめ買い需要に対応する提案をした。大塚家具で商品を揃えとなると金銭的な負担が大きくなってしまう。

商品の質を下げず、金銭的なハードルを下げるために、私達が提案したのは、まずはレンタルという形で商品を試してもらい、その後購入、返却を選択できる購入検討型のRent-to-Ownだ。

アメリカで主流なRTOは、商品購入時の金銭的・心理的リスクを軽減し、購入成約率を上げることが期待できる。今後レンタル事業を展開していく大塚家具にとって私達の提案は実に興味深く、今後も詳しい情報提供をしていただきたいというお言葉をいただいた。

(文責：児玉千明)

当日は、多忙にもかかわらず佐野さんをはじめ多くの方々に出席いただき、貴重なコメントを頂いた。仲介の窓口役をしていた岩城さんにもお礼を申し上げます。

岡部康弘





経営学科教授 岡村 国和

私たち岡村国和ゼミナールは、ジョイントゼミナール、東京学生保険ゼミナール、慶応保険学会学生報告会の3つの報告会に参加しました。

12月2・3日に、愛知学院大学田畑ゼミ・福岡大学伊藤ゼミ・そして獨協大学岡村ゼミの3大学3ゼミが集まって、計6報告のジョイントゼミナールを行いました。

生保班は「変革を迎える日本の生命保険会社～死差依存経営の終焉か?～」という題で、国際的な保険に関する取り決めによって変革を迫られる日本の生命保険会社のこれからについて報告しました。

損保班は「SAEレベル4以上の完全自動運転化に対する責任主体の所在とその対応策について」という題で、完全自動運転車が普及した社会においては、自動車を製造したメーカーや自動運転のシステム開発元に製造物責任が及ぶと結論づけ、従来の保険的手法ではなく企業(関連企業集団)がリスクを保有するキャプティブという手法で、リスクマネジメントの有用性について報告しました。

今回の報告を通して、聞き手に内容を理解してもらうための工夫の少なさが課題としてあげられました。プレゼンテーションの能力は、ゼミ活動はもちろん、社会人になってからも求められるスキルだと思うので、これを今後の発表での課題としながら、より高度な研究報告へと繋げていきたいです。

(文責:田中政輝)



12月9日、上智大学四谷キャンパスで行われた東京学生保険ゼミナールに参加しました。

東京学生保険ゼミナールには、慶應義塾大学、上智大学、東京理科大学、獨協大学、日本大学、明治大学、早稲田大学の計7大学9ゼミ約200名が参加しました。

今年私たち獨協大学岡村ゼミは、保険理論の原点に立ち返り、生命保険会社の収益構造の現状に異を唱え、「変革を迎える日本の生命保険会社～死差依存型経営の終焉か?～」を発表しました。日本における新たな規制の導入による影響について考察し、それに伴う生命表の改定を例に挙げ、これから先の生命保険会社の展望についてまとめました。質疑応答では、他大学

の学生や先生方をはじめ、生命保険文化センターの方々にも様々な意見・感想を頂き、多くの改善点を発見することができました。ここで学んだことを今後の研究課題へとつなげたいと思います。

東京学生保険ゼミナールは、1日を通して行われました。大学毎に異なったテーマについて発表を行った為、報告内容は多岐にわたり、他大学の発表を通して多くの知識を得ることができました。私たちは半世紀以上の伝統ある東京学生保険ゼミナールにて発表する機会を頂き、また他大学の発表を聞く機会を頂き、大変貴重な経験をすることができました。

(文責:浅香拓海)



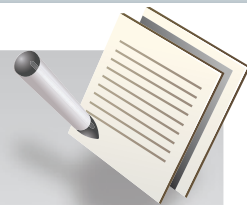
12月16日、慶応義塾保険学会主催の学生報告研究会に参加しました。この報告会は、学生による報告のみですが、保険会社等に働く実務家の方々を含め約100名が参加しました。

私たち慶応班は、現在の地震保険制度の保険料の高さに着目し、CAT債と呼ばれる保険とは異なる仕組みを用いて地震保険料の低減化を図る提案をしました。提案内容は、保険とCAT債を組み合わせたICATを提唱し、プロスペクト理論を用いて理論的分析を行い、それを基に実際にシミュレーションをするというものです。質疑応答やそのあとの懇親会では、様々な保険関係の方からの貴重なご意見を頂きました。

今回の報告内容は、慶應義塾保険学会発行の学会誌に載ります。ですので、頂きましたご意見を参考により理論的かつ実践的な研究をし、現在の地震保険制度のより良い発展につながるような論文作成をして参りたいと思います。

(文責:鶴田龍也)





経営学科教授 鈴木 淳

鈴木ゼミナールは2年次に経営意思決定に関する基礎的な知識の習得、3年次に経営問題解決を目指したグループによる検討とプレゼンテーション、4年次に卒業論文の作成を目標に活動を行っています。

日頃は演習の授業時間を中心にゼミナール活動を行っていますが、それ以外にも企業見学や他大学との合同ゼミナールなどの活動も行っています。

2017年度は9月21日に2年生と3年生合同で企業見学を行いました。南千住にある東京ガス千住見学サイト「Ei-WALK」(イーウォーク)を見学し、社員の方の説明を聞き、熱心に質問するなどして、エネルギーと暮らしの未来について考えました。写真1は、コンセプトハウスと燃料電池自動車の前での集合記念撮影です。



写真1 東京ガスEi-WALK 見学

また、11月13日には、明治大学駿河台キャンパスリバティタワーにて、明治大学経営学部牛丸ゼミナールと青山学院大学経営学部薄上ゼミナールとの共催で合同ゼミナールを行いました。

まず、各大学4~5チームによる大学別のグループプレゼンテーションを行いました。鈴木ゼミナールからは3年生が「築地市場移転問題を考える」「アニメを使った地域活性化」「IoTによる首都圏鉄道の混雑緩和」「アシックスグロースプラン2020への提案と意思決定」「日本における統合リゾートとカジノの検討」などのテーマで発表しました。他大学のプレゼンテーションを聞き、ストーリーの立て方や分析、提案の巧みさを学びあい、他大学の先生のコメントから新しい示唆もいただきました。

また、各大学の混合メンバーによるグループをその場で作り、グループディスカッション(「グルデイス」)を行いました。当日提示されたテーマに基づき、与えられた時間内に、初対面のメンバーで討議しグループとしての意見をまとめました。他大学の学生に対して物怖じせずグループの進行役や発表役などを担当している獨協生の姿も見られ、潜在能力を示していました。そしてグループごとに評価役についた4年生から、グルデイスでの立ち回りについて、アドバイスを受けていました。写真2は合同ゼミナールでのグルデイスの様子です。



写真2 合同ゼミナールの様子

採用選考ではグルデイスを取り入れる企業も多く、それを勝ち抜かないと面接など次の選考へ進めないという青山の4年生の発言を、3年生たちは気を引き締めた表情で聞いていました。

さらに、12月14日には4年生の卒業研究最終報告会が学内で行われ、それぞれが執筆した卒業論文について、担当教員やゼミ生の前でプレゼンテーションしました。

これらのゼミナール活動にご協力いただいた、東京ガスの矢作様、青山学院大学の薄上先生、明治大学の牛丸先生、それぞれの大学のゼミ生みなさんに感謝申し上げます。

地域活性化に力を入れる高松ゼミ



経営学科教授 高松 和幸

私たち高松ゼミは、埼玉県で組織する「ふるさと支援隊」として、過疎化・高齢化が進む中間山地域の活性化の活動を行っています。2013年度から2016年度までは埼玉県小川町越中地区をフィールドに、農業などを中心として地元の方と一緒に野菜などを作り、朝市や夕市の行事に参加することで販売などの支援をし、休遊地(耕作放棄地)利用と地域活性化を目指して、地元の方と一緒に取り組みました。また、収穫した野菜を地域の皆さんと一緒に収穫祭を開き、料理の作り方を学び、余興の出し物を工夫することで、交流を楽しく深めてきました。小川町での4年間のふるさと支援隊活動はこれで終了しましたが、今も地域の様々な行事(七夕祭りなど)に参加し、交流を続けています。

交流ができました。この人情味あふれる地域の方々に触れ、地域の良さに気付かされました。これらの情報をもとに、さらに研鑽を重ねて活性化につながるものをピックアップし、学生ならではの意見交換を行って行く予定でいます。



収穫祭で料理を囲んでの一場面

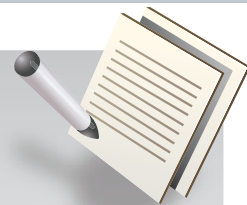


ハイキングの様

2017年度からは、活動場所を飯能市西吾野地区に移り、活動することになりました。本格的な活動としては、8月にはまち歩きを行い、リサーチを行い、さっそく地元との交流を深める機会を作りました。飯能市は森と自然豊かな環境が売りの森林宣言都市です。大自然のなか森を歩いていると、あちこちでハイキング姿の人を見かけます。そう飯能市は環境エコツーリズムで有名です。トレッキングなども盛んに行われていて、なかにはトレイルランといい、走りながら山や森を駆け巡る方がいます。私たちは、初めてのまち歩きでは10KM程度の山道を歩き回りました。実際に歩いてみると森林の切り出しのための道路のためか整備が行き届いていない印象がありました。お昼には近くの廃校となった校舎を利用させていただき、地元の方々が作る料理をいただきました。いうまでもなく交流も自然に盛り上がりました。最後まで楽しく

12月にはトレッキング・コースの整備を予定しています。歩いて距離を測定し、高低差を測量し、図面を起こしていきます。初めての経験ですが、コース整備の基本を学ぶ機会に恵まれました。私たちは、この活動を通して、2118年度には、トレイルの初心者向けコースやトレッキングの上級者コース、さらにはハイキングがファミリーでできるコースの整備を行い、コンサートや野外映画会など多彩なイベントを開催したいと考えています。また、トーベ・ヤンソンあけぼの子ども森公園など、フィンランドのムーミン村を彷彿とさせる飯能市の景観活動にも協力し、地域活性化へつなげてまいります。

高松ゼミ 3年 埴原良介



経営学科准教授 堀江 郁美

2017年度は、2年22名、3年20名、4年18名のゼミ生それぞれが協力しあい多くの成果を残した。どの学生も自分たちでやりたいことを、楽しみながら学習し成果を出せたことを嬉しく思う。

機器に親しむ

2年生では、簡単なプログラミング言語を習得しながら、機器に親しむためにグループで動画を作成した。動画の種類も作成方法も様々であり、それぞれのグループが思い思いに様々な方法を用い動画を作成している。図1はアクエアスのパロディを獨協バージョンで作成したものであり、図2はストップモーションコマドリでレゴの人形たちに恋ダンスを踊らせた動画の静止画である。彼らが機器を味方につけ、楽しみながら作成していることが写真からもわかる。実際の動画をお見せできないのが非常に残念である。



図1 アクエアスのパロディ



図2 レゴ人形の恋ダンス

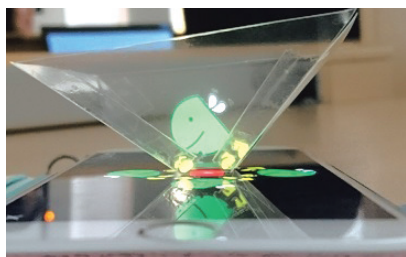


図3 ドク太くんの3Dホログラム

夢を形に

3年4年ではより深く技術を学習し、夢や趣味を形にした学生が多かった。3年生は野菜栽培初心者をサポートする機器を作成しプレゼンコンテストに参加した。他には、スマートフォンアプリの音声認識機能を利用した若者言葉発見アプリの作成をしたり、ドク太くんを3Dホログラム(図3)にしたりした。

4年生は、高度な技術を武器に個性豊かな活動ができた。図5は文化祭で行ったバーチャルアイドルのコンサートの写真である。他に、映像編集における視覚効果や効果的な演出方法について調査したり、ニコニコ動画における「草」コメントの出現傾向について調査したり、ゼミ専用のSNSを作成したりした。

今年は卒業生のプロジェクトを引き継ぐ学生達もでた。今後も、在校生卒業生を含め、堀江ゼミ全体で楽しく夢を形にする活動を応援していきたい。



図4 プロコンプロジェクトのゼミ内発表



図5 バーチャルアイドルのライブ



経営学科専任講師 山崎 尚

① インゼミの概要および結果

山崎ゼミ3年生は、2017年10月15日(日)に跡見学園女子大学(茗荷谷キャンパス)で、同大学・山下ゼミ、帝京大学・金子ゼミ、獨協大学・山崎ゼミによる3大学合同のインターゼミ(インゼミ)を行った。山崎ゼミは、大手グルメ情報サイトを運営する株式会社ぐるなびと株式会社カカクコムについて財務分析を行い、その結果を発表した。

インゼミでは、どのチームの発表が一番良かったかの投票や発表の良かった点・悪かった点の共有が行われたが、その結果、山崎ゼミは財務分析で用いたグラフが見やすかった、語句の説明がわかりやすかった等の評価をもらい、出場した4チームの中で最優秀賞をいただくことができた。

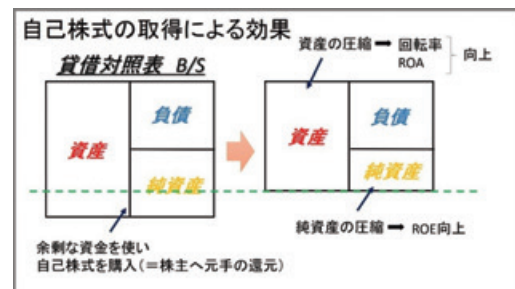
② インゼミでの報告内容の概要

発表した内容の大まかな流れは、(1)2社の企業紹介、(2)収益性分析、成長性分析などの財務分析、(3)2社が抱える課題と将来展望といったものであった。

まず(1)企業紹介では、ビジネスモデル、売上高構成比、利用者数・男女比、年代別利用属性などについて2社の比較を行った。その結果、ぐるなびはグルメ情報サイト「ぐるなび」によりほとんどの収益を得ているのに対して、カカクコムはグルメ情報サイト「食べログ」のほかに、電化製品等の最安値を調べることができるサイト「価格.com」からも収益を得ていることがわかった。また、ぐるなびは飲食店から加盟料収入を得る代わりに、飲食店の情報が掲載されたウェブページを作成するのに対して、食べログはユーザーからの情報提供によりお店のウェブページが作成され、あまりコストがかからないことがわかった。

次に(2)財務分析では、山崎ゼミのテーマでもある財務会計により作成される財務諸表のデータをもとに、どれほど効果的に儲けているかがわかる収益性分析、資金や資産をどれほど効率的に活用して利益を生み出しているかがわかる効率性分析、成長性分析、企業の支払能力や健全性がわかる安全性分析について2社の比較を行った。収益性分析と効率性分析からは、両社はとても優良な企業であることがわかった。特に、カカクコムの売上高当期純利益率は直近の年度で33%、自己資本利益率(ROE)は同42%と、ほかの企業ではあまり見られない高い収益性と効率性を誇っていることがわかった。安全性分析でも、両社はかなり高い安全性を有していることがわかった。しかし、一見よさそうに見える高い安全性も、裏を返せば手元に資金が余り、その資金を上手く運用できていない証拠であることを指摘した。

最後に、(3)将来展望では、財務分析の結果として明らかになった2社の課題(余剰資金をうまく運用できていない)の解決策を提案した。2社ともこれまで、事業に回されずに手元に残っている余剰資金を使い、自己株式の取得と消却を行うことで効率性を上げようと試みてきた(図参照)が、企業として成長するためにはその余剰資金を新たな事業に回したほうが良いことから、新たな事業としてどのようなものが考えられるかを両社の経営戦略も参考にしながら検討した。カカクコムについては今後、海外への進出や外部との連携強化に力を入れること、ぐるなびは第2の柱となる事業を構築することが大切であり、その一つとして都市部ではない地方への進出と旅行業との連携が重要であると提案した。

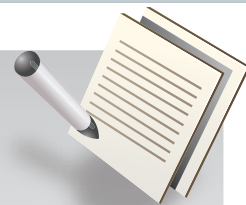


③ インゼミまでの経緯および感想

私は今回のインゼミで、財務分析チームで主に数値の計算やグラフの作成を担当した。夏休みに丸2日を使って作業するなど非常に大変な時期もあったが乗り切ることができた。3大学が集まってプレゼンテーションを聞いたり発表することは初めてで、とても良い経験をさせていただいた。私は今回のインゼミを通じて、自分が人前に立って発表するよりも発表する人をサポートする側が向いていることがわかった。今後の就職活動や社会人になった時には、サポートが出来る人間であることを強みに頑張っていきたいと思う。

(文責:経営学科3年 家後 大輝)





国際環境経済学科教授 木原 隆司

1. 2年生の活動

「途上国における開発援助とは何か。」を基に木原ゼミ2年生は学んでいる。春学期はテキストで「開発経済学」の基礎理論や基礎数学を学ぶとともに財務省を訪問し、秋学期では我が国の開発援助・国際金融機関（JICA、JBIC）、国際機関（世界銀行、米州開発銀行、アフリカ開発銀行）に伺い、その実態を調べ考察した。木原教授の授業方針である「強靱な国際人」を目指すため、私たち2年生は3年次に行く海外での現地視察や、より深い開発問題を研究するために開発経済学における国際公共政策や開発協力、援助協調の知識の基礎を固めている。これは世界銀行に訪問した際にも説明があったが、SDGsはMDGsとは異なり、貧困の改善、経済成長と雇用の向上、持続可能な生産と消費などの目標を掲げており先進国や民間の企業も対象としている。つまり、私たちの未来に深く関係する事柄を学んでいる。これほど深く学び、実際に訪れ見て、聞いて、話すなど五感を通じて活動するゼミはそうないだろう。また、財務省、国際機関へ訪問できるのも木原ゼミの贅沢なところである。これからも2年生は木原教授の指導のもと、木原教授の座右の銘である「悩むくらいならやってみよう」の精神でゼミの活動に取り組む所存だ。

(2年 石井幸太郎)



米州開発銀行アジア事務所訪問・大石所長とともに

2. 3年生の活動

木原ゼミナール3年生は春学期には「貧乏人の経済学」という教科書を用い、4班に分かれて発表を行い、発表班とその他の班で質疑応答を行った。この教科書では健康や教育など様々な要因によって貧困の罅に陥ってしまう事例やランダム化対照試行（貧困問題に対する施策を実施する場合としない場合の社会に与える経済的影響を比較する実証実験）による貧しい人々の行動原理の分析によって明かされる貧困の原因などを学んだ。夏季休暇には海外演習としてカンボジアへ訪れ、ADBや国際機関などで直接担当者からお話を伺った。それまで教科書を通して学んでいたことが実際の現場ではどのように機能しているか、実際に訪れて発展途上国の現状を知ることができた。自分たちで現地に訪れなければわからないことがいっぱいあった。今後の研究に今回の海外演習の経験が大きくいかされるだろう。秋学期は、英語で書かれた教科書を用い主に対外援助について学んだが、特にドナー国と受益国のそれぞれの問題や二国間援助機

関・多国間援助機関の役割・コンディショナリティーなどを学んだ。秋学期は、春学期と異なり英語を日本語に訳す必要があったため、適当な訳を当てはめるのが難しく、誤訳をしてしまう場面が多々あったが、その都度、木原教授に指摘していただき、ゼミ生はしっかりと理解することができた。最後に、春学期・秋学期を通じ、貧困問題や援助について深く学ぶことができたのはもちろんのこと、グループワークによって、協調性を身に付けることができたのがとても良かったと思う。

(3年 飯野夏美)



カンボジア開発援助視察調査・アンコールワットの前で

3. 4年生の活動

木原ゼミ4年生では、これまでに得た知識や海外視察の内容を踏まえて、インターゼミナール、プレゼンコンテストそして卒業論文に取り組んでいます。法政大学（小黑ゼミ）と成城大学（中田ゼミ）と合同で行ったインターゼミナールでは、ミャンマーにおける開発問題を教育・ジェンダー・インフラ・政治の視点から問題提起し、今後の展開について発表しました。大学間における質疑応答では、これまでに気づけなかった点を指摘していただき、大変有意義な時間となりました。さらにインゼミ後の懇親会でも、普段関わることのない他大学の教授や生徒達と意見交換ができ、交流を深めることが出来ました。また、ゼミの時間前（火曜の1限）には「計量経済分析」について学習し、現実の経済活動から得られる数値を経済理論に基づいて推測する方法を習得しました。個々の卒業論文においては、中間報告や最終報告会を行い、各々の研究の進捗や内容の情報交換を通して意識を高めました。木原ゼミを通して、知識の習得だけでなく、積極性・協調性・責任感を養うことができ、それぞれが人間として成長できたように感じます。

(4年 酒寄静流)



法政大・成城大とのインゼミ・終了後全員で



国際環境経済学科教授 中村 健治

私のゼミでは環境の大テーマの下で、様々な課題について調査しています。中テーマの一つとして都市と自然との関係があります。ここ獨協大学は東京の郊外にあり、都市環境の中にあるといえます。この獨協大学での自然の状況の調査、大学の位置する草加市の歴史、また都市の自然を支える公園の実態の調査などを行ってきています。

大学での蜂の観察はその一つです。キャンパス内の研究所棟の西側に竹筒トラップと呼ばれる細い竹を短く切ったものを置きました。これにハナバチの系統の蜂が蜜などをいれて卵を産みます。昨年に引き続いて今年も行ったところ、昨年とほぼ同じと思われる幼虫が入っていました(写真1、2)。入っていた竹筒の数は昨年よりも多く、また面白いことに、竹筒の中には、昨年は1本に1匹しかいませんでしたが、今年は数匹が入っていました。数匹入ることが通常と言われており、昨年は少し異常であったのかもしれない。この調査は今後も続ける予定です。他にも3年前にかけた鳥の巣箱の調査も続けています。生物活動は1年を周期としていますから、その変化を見るには何年を続けなければならないので、卒業論文のテーマには向かない面があります。それでもこれをきっかけとして、「学生の虫への関心の持ち方」の調査などに発展しています。

都市環境の実態と今後を考えるため、身近である草加市の歴史の調査も行っています。

草加市のみでは分かりにくいので、学生の地元の都市との比較も行っています。これにより、草加市が昔は沼地のような平たい土地であり、城下町ではなく、宿場町であり、また東京郊外として発展してきたことを再認識しています。学生の中には比較により自分の地元を再認識した者もいました。



写真1 竹筒トラップの調査

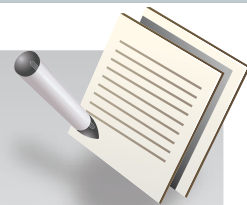


写真2 竹筒トラップの竹筒の中



写真3 つくば宇宙センター見学時のセンター研究員による講義

2017年度浜本ゼミ活動報告



国際環境経済学科教授 浜本 光紹

浜本ゼミの演習Iでは、専門文献や統計資料などの読み方・まとめ方といった基本的なスキルを身につけるとともに、貧困や食料問題などの今日的な課題をテーマに設定して調査・分析を進め、それをまとめて報告するという作業を行いました。また、『環境経済学入門講義[改訂版]』にある演習課題を基にテーマを設定して、環境経済学や環境政策にかかわる調査研究を行っています(写真左はゼミの風景)。ゼミ生には、自然に触れたり農作業を体験したりする機会を持ってもらいたいと考えています。その一環として、さつまいも苗の植え付けと収穫の作業を行いました(写真右下)。

演習IIでは、「社会をよりよくするにはどうすればよいか」を統一的なテーマとしながら、自分たちでテーマを設定して調査を企画・実施してもらっています。今年度は、「まちづくり —農山漁村再生可能エネルギー法—」「デジタル化と紙の消費量」「食品ロス」「観光振興 —東京オリンピック後の日本に向けて—」「東京一極集中を防ぐ地方活性化」という5つのテーマについて調査グループをつくりました。各グループの調査内容と途中経過については、ゼミ以外の学生にも知ってもらうために、10月のゼミ合同相談会の場でスライドの打ち出しを掲示しました(写真右上はその準備作業の際に撮影しました)。各グループの調査結果は2018年1月のゼミで報告されました。



“持続可能な社会を創る”ための
プロジェクトと論文の成果報告

国際環境経済学科教授 米山 昌幸

本ゼミは、グローバル社会における持続可能な開発に関する問題を経済学的視点からアプローチするとともに、身近な問題として捉えてプロジェクトを設定し、問題解決に向けて実践的に行動するPBL(プロジェクト・ベースド・ラーニング)に取り組んでいる。学生は専門知識を深めるとともに、社会にどう貢献できるか、社会をどのように変えていくことができるかを主体的に考えて能動的にプロジェクトに取り組み、外部のコンペにも積極的に挑戦している。2017年度にゼミ生が取り組んだプロジェクトと論文の成果を以下に披露させていただく。

2017年度、いくつかの成果を出すことができたのは、学生が社会の抱える問題を自分事として捉えて、真に実現可能性や実効性のある提案をしたことが評価されたのだと思う。コンテストは入賞が最終目標ではなく、提案内容を実施させていただいたあとに本当の評価を受けることになる。その意味において、提案内容を実施してもらえなければ、入賞提案とは言え、たんなる絵に描いた餅でしかない。次年度は提案内容を実施させていただけるように、さらに一段上を目指してプロジェクトや論文に取り組んで欲しい。

「春日部市大学生政策提案コンテスト2017」にて審査員特別賞受賞

11月12日(日)、埼玉県春日部市で大学生の視点を活用した地域活性化を図ることを目的とした「春日部市大学生政策提案コンテスト2017」が開催され、4大学17チームが参加した。竹花将明(代表:経済学科3年)、飯島竜太郎(経営学科3年)、大野姫香(国際環境経済学科3年)、黒鯛知也(経済学科2年)の4名からなる米山ゼミチームは、「花が結ぶ人と街～春日部の街を彩る『咲かせ隊』～」と題する発表を行い、審査員特別賞を受賞した。同チームは、春日部市の点在している地域資源の活用や、住民間の交流促進を目的に「プランター設置」「花を咲かせ隊」「環境教育」の3本柱を実施して街を花で彩る提案を行った。審査員からは「住民と学生が積極的に関わる提案であり、実現性と持続性がある」と高評価を得ることができた。

私たちがフィールドワークで春日部市を訪れた際、街を歩いている人がほとんどおらず、閑散としていると感じた。そこで、住民が歩きたくなるような彩りのある街をつくりたいと思い、今回の提案内容をまとめた。ただ花で街を彩るというだけの提案ではなく、住民が自分達で花を植え、街づくりに参加することで、愛着のある街、ずっと住みたくなる街をつくりたいと考え、プレゼンテーションに臨んだ。この点が審査員に評価していただけて、大変嬉しい。また、今回のコンテストではグループで目標に向かう楽しさも知ることができた。



「立山町インターカレッジコンペティション2017」にて優秀賞受賞

12月2日(土)、大学生が富山県立山町の地域活性化策を提案し、競い合う「立山町インターカレッジコンペティション2017」が開催され、8大学9チームが参加した。木村勇斗(代表:国際環境経済学科3年)、竹花将明(前出)、田村香純(経営学科3年)、米川佳那(経済学科2年)、松本美優(経営学科2年)の5名からなる米山ゼミチームは、「自然・文化・人をつなぐエコツーリズム～活力ある立山を目指して～」と題する発表を行い、優秀賞を受賞した。

町の地域資源を発掘するインベントリー調査を実施し、地元学としてまとめ、講座・ワークショップを実施することにより、住民が自律的にエコツアープログラムを提案していく仕組みを考えた。同チームは、9月中旬に3泊4日

でフィールドワークに入ってヒアリングを実施し、コンペ直前には長年、飯能市エコツーリズム推進協議会会長を務められた犬井正学長や、エコツーリズムがご専門の国際環境経済学科大竹伸郎准教授にアドバイスをいただき、最後は米山昌幸教授の指導の下、ゼミ生総動員で今回の提案をまとめた。

今回の提案は、「町民自らがまちづくりに参加し、立山町はたくさんの魅力にあふれているということに気づいてほしい」「地元に着や誇りをもっと抱いてほしい」という想いで行った。また、町民と観光客とのつながりを強め活力ある地域になることを願い立山町、町民、そして私たち学生の3者が連携して行うことを軸とした提案にした。

なお、本コンペ参加に際しては、経済学部学生活動支援制度より交通費の一部を助成していただいた。この場をお借りして御礼を申し上げる。



「学生懸賞論文」最優秀賞、「ACAP 消費者問題に関する『わたしの提言』論文賞入選、「NRI 学生小論文コンテスト」奨励賞を受賞

本学学生懸賞論文に「駅名変更」をテーマに選んで応募した米山ゼミ松澤知也(代表:経済学科4年)、大藤美沙(経済学科4年)、深澤なつは(国際環境経済学科4年)の3名による共著論文「地域交流における大学の役割～駅名変更をきっかけとして～」が最優秀賞を受賞した。本論文は、2017年4月1日に「松原団地駅」から「獨協大学前草加松原駅」へ駅名変更が行われ、大学の名称が新駅名に採用されたことで、大学の地域の中核としての社会的責任はますます大きくなると指摘する。すでに草加商工会議所・草加市・獨協大学が連携して実施している活動は多岐にわたるものの、実態としては大学が地域の拠点になっているとはいえない。インタビューと意識調査からは大学と地域住民の交流不足が課題であることが明らかとなった。そこで、本学が今後より一層、地域の中心として貢献していくためには地域交流の推進が重要であるとし、学内に「地域の窓口」を開設することを提案している。大学として公式に学生と地域住民の交流を推進していく体制を整えることで、大学が地域コミュニティの拠点としての役割を十分に発揮できるようになってこそ、駅名変更の実態が追い付くと述べている。



この他、公益社団法人消費者関連専門家会議(ACAP)主催の第33回2017年 ACAP消費者問題に関する「わたしの提言」コンテストにおいて、「持続可能な社会に向けた倫理的(エシカル)消費」をテーマに選んで募集した竹花将明(前出)の論文「家庭系食品廃棄物リサイクル促進に向けての提案」が「入選」に選ばれた。

また、第12回となる野村総合研究所(NRI)主催の「NRI学生小論文コンテスト2017」は、「Share the Next Values! 地方の課題をイノベーションで解決する。」をメインテーマとしてコンテストを開催。「地方創生」をサブテーマに選んで応募した木村勇斗(前出)の論文「Uターン就職者増加によって県外転出を抑制する奨学金返済補助制度の提案」が<大学生の部>奨励賞を受賞した。

獨協大学環境週間 “Earth Week Dokkyo 2017”の 開催報告



Earth Week Dokkyo 実行委員会 代表 飯塚 琴美 副代表 大藤 美沙

国際環境経済学科と環境共生研究所の共催で、獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo 2017”を6月と12月の2回、開催しました。このイベントは、地球環境保全に関する啓蒙活動を実施することで、学生、教員、職員の意識を高めてキャンパスライフを見直し、持続可能な地球社会の実現を目指すことを目的として、国際環境経済学科の1期生が提案、Earth Week Dokkyo 実行委員会が企画・運営して、2016年12月に初めて開催されたもので、2017年度は電力需要期の夏冬の年2回開催イベントとして継続実施したものです。

今回で3回目の開催となったEarth Week Dokkyoですが、まだまだ学内で周知されているイベントとは言えません。今後はこの企画の開催趣旨を多くの学生・教職員に理解してもらい、学部・学科を超えて広く親しまれ、環境や開発について発信し情報交換していけるイベントにしたいと考えています。

“Earth Week Dokkyo 2017～Summer～”開催

6月26日から7月1日までEarth Week Dokkyo 2017～Summer～が開催され、5つのゼミ・学生団体が参加し、展示やイベントを実施、授業公開も行われました。また、実行委員会主催で、学内のハーブガーデンで栽培しているラベンダーを使った「ラベンダースティック・ワークショップ」、「緑のカーテン」を作るためのゴーヤの苗の配布などのイベントが行われました。6月28日には第4回講演・討論会「フクシマの未来を考える」が天野記念館大講堂で開催され、東北をはじめ、熊本、ネパールなど被災地支援を行っている「ツン隊長」こと角田寛和氏による講演と、東日本大震災復興支援映画「MARCH」の上映会、ボランティア活動をテーマに本学学生によるパネルディスカッションを実施しました。

6月30日開催のイベント「草加の野菜を食べよう!～ピザ窯で作るピZZァ～」では、地産地消の魅力や大切さを認識してもらい、食と農に関心を深めてもらうために、草加で採れた野菜をトッピングして窯で焼いたピZZァが無料で振舞われ、学生の長蛇の列ができました。また6月30日、7月1日の2日間、学内で農家の方が直接販売する「ファーマーズマーケット」を開催。草加市の小松菜、枝豆、トマトなどの旬な野菜が並び、安くて新鮮とあって大盛況ですぐに完売しました。フードマイレージを減らして地産地消を促すと共に、農家と消費者をつなぎ合わせ、近隣住民に新たなコミュニティを提供していくイベントとして、定期開催を目指しています。



学内で初めて開催された「ファーマーズマーケット」



「草加の野菜を食べよう!～ピZZァ窯で作るピZZァ～」イベントで草加の食材をふんだんにトッピングしたピZZァを焼く学生

Earth Week Dokkyo 2017～Winter～開催

12月11日から12月16日まで開催されたEarth Week Dokkyo 2017～Winter～には、6つのゼミ・学生団体が参加し、展示やイベント、授業公開が行われました。実行委員会主催のイベントとしては、「不都合な真実」の映画上映や「西棟の省エネ・創エネ設備見学ツアー」「ローズマリーでミニクリスマスリースを作ろう」「エッグキャンドルナイト」が実施されました。

12月15日には、地球温暖化防止コミュニケーター吉田征人氏による講演会「未来の地球と私たちの暮らし～みんなで考えよう～」と、吉川市市

議会議員・環境カウンセラーの岩田京子氏による講演会「化学物質と私たちの暮らし」が行われました。吉田氏には、未来の私たちの暮らしと地球温暖化の関わりを知ることで身近に感じてもらい、問題意識を高めることを目的にご講演いただきました。気候変動問題への国民の理解と積極的な取り組みが喫緊の課題であることがよく理解できました。岩田氏には、生活の中でとても身近な石けんや合成洗剤が環境や健康に与える影響についてお話いただき、参加学生との熱い意見交換も行われました。河川の水質汚染につながる合成界面活性剤が入った洗剤をなるべく使わず洗い物ができて手荒れ予防にもなる「アクリルたわし」と「廃油石けん」の配布にもご協力いただきました。



「エッグキャンドルナイト」点灯の様子。たくさんのエッグキャンドルが中庭を賑やかに灯しました。



「ローズマリーでミニクリスマスリースを作ろう」では、講師の和田さんをはじめ、和田先生のご協力もいただき、素敵なリースが完成しました。

埼玉県の「大学連携普及啓発活性化事業（省エネ・省CO₂事業）」への取り組み

6月30日には、実行委員会のメンバーが、埼玉県の大学連携普及啓発活性化事業（省エネ・省CO₂事業）に応募した「街中に広げよう!ゴーヤによる緑のカーテン」「日本の伝統文化で『涼』を感じよう!」「エッグキャンドルナイト」「旬の野菜カレンダーで省エネ・省CO₂に貢献しよう!」の4企画が採択されました。採択を受けて埼玉県知事と犬井正学長が協定を結び、県から予算をいただいて年間を通じて実施しました。

Earth Week Dokkyo 2017～Summer～期間中の6月29日には、家庭で緑のカーテンを作ってもらい消費電力の削減を促すため、ゴーヤの苗を学生や教職員に配りました。8月22日には学内で収穫したものと草加市からご提供いただいたゴーヤを使ってカレーを作り子どもたちに振舞う収穫祭を実施しました。来年度に向けてゴーヤを苗から育てるために、種の回収も行いました。

クーラー等の使用を抑制し地球温暖化の原因となるエネルギー消費を減らすため、打ち水がもたらす効果の啓蒙と習慣化を促すことを目的とした「打ち水打ち隊」を学生と卒業生から結成し、7月22日に「草加よさこいサンパフェスティバル」で浴衣を着て打ち水を打ちました。

Earth Week Dokkyo 2017～Winter～では、12月12日にエッグキャンドルワークショップを開催し、学内で集めた168個の卵の殻と学食から出た廃油を活用したキャンドルづくりを行いました。12月14日のエッグキャンドルナイトは、「電気を消して、豊かな時間を!」をスローガンに節電を促すイベントとして実施し、参加者と会話をしながら啓蒙活動を行いました。「旬の野菜カレンダーで省エネ・省CO₂に貢献しよう」では、草加市内の農家の方を取材し、市内でとれる旬の野菜が一目でわかるカレンダーの作成に取り掛かっています。

この4企画の活動については、12月2日に本学で開催された「第8回低炭素まちづくりフォーラム in 埼玉」の大学連携分科会「あなたと解決 大学生が感じた課題～大学生の環境取組にあなたの意見を聞かせてください～」において報告させていただきました。今後、カレンダーの作成と、4企画すべての活動を報告書にまとめて2月には県に提出する予定です。

福島県「大学生の力を活用した集落復興支援事業」実態調査の実施について



獨協大学地域活性化プロジェクト 米山チーム・大竹チーム

2017年度、福島県の募集する「大学生の力を活用した集落復興支援事業」に、獨協大学から地域活性化プロジェクトとして2チームが申請し、採択されました。福島県は、過疎・中山間地域の集落復興を掲げ、大学生という「外からの力」を活用して集落の活性化を図るとともに、将来にわたる若者等との継続的な交流の構築を図ることを目的として、2009年度から大学生グループに集落の実態調査を委託しています。

本事業には、全学の学生に向けて参加希望を募ったところ、6学科から19名もの学生(英語学科1名、交流文化学科1名、経営学科2名、国際環境経済学科12名、国際関係法学科2名、総合政策学科1名)が集まりました。そこで、国際環境経済学科大竹伸郎准教授の協力を得て2チームに編成し、県に申請し、2チームとも採択されました。

両チームは、県が指定する集落の実態調査を実施し、以下にその実施報告を掲載しました。両チームは、住民の生の声を聞くことで地域の課題を自分事として受け止め、地域に愛着をもつとともに、自分たちに付託された熱い想いを肌で感じ取って帰ってきました。また、部外者である自分たち大学生の考えていた「地域活性」と、地域住民の方々が望む「地域活性」には大きなギャップがあることに気付いて、地域の抱える問題にきちんと向き合っていなかったことを痛感して帰ってきたようです。

本事業において集落の活性化に貢献する提案をまとめることができれば、翌年度の委託事業に採択されて実証実験を行うことができます。今後、両チームは翌年度の実証実験事業の採択を目指して、2月にはそれぞれの地域の現状と課題をまとめ、その課題に対する提案をまとめて、県が主催する報告会で調査結果・集落活性化策を発表し、調査研究報告書をまとめることになっています。両チームの提案内容に期待したいと思います。

(国際環境経済学科教授 米山昌幸)

田村市船引町瀬川地区担当「獨協大学地域活性化プロジェクト米山チーム」の活動報告

代表 荒川桃花

田村市船引町瀬川地区を担当する米山チームは、荒川桃花(学生代表:交流文化学科4年)、荒川薫(副代表:経営学科3年)、大久保智尋(副代表:国際環境経済学科3年)、鈴木翔大(英語学科4年)、浅野英里(国際関係法学科4年)、梶沼実沙子(同学科4年)、今井沙也果(国際環境経済学科2年)、川嶋亜実(同学科1年)、松江竜生(同学科1年)、吉田智晶(総合政策学科1年)の3学部6学科の計10名からなるチームです。

米山チームは、11月18・19日に区長、地域づくり推進員、田村市役所協働まちづくり課職員らに同行していただき、瀬川地区の現地調査を実施しました。1日目には瀬川小学校で開催されていた文化祭「瀬川小フェスティバル」にボランティアとして参加。豚汁調理と餅つきに協力し、「やってみっ会」の方が手打ちされたお蕎麦と一緒にいただきました。児童や保護者の方々へのインタビューにより、地域住民の不安や要望を伺うことができました。瀬川地区を一周して現地視察した後、瀬川住民センターに区長、民生委員、農業委員、チーム瀬川、地域づくり協議会、「やってみっ会」のみなさんにお集まりいただき、瀬川地区の現況説明を受けました。2日目には農産物等の現地視察を実施。葉タバコ農家、エゴマ搾油所、日本ミツバチ養蜂場の視察、昼食を取りながら地域住民との交流会、山の傾斜地での肉牛畜産を営む酪農家、レタス・菜の花の有機栽培農家、田村市農産物直売所JA福島さくら「ふあせる たむら」の視察などを行いました。

現地調査によって瀬川地区の現状を自分たちの目でみて、地域の抱える問題を肌で感じることができました。今後はそれらの問題を整理し、課題に落とし込み、瀬川地区を活性化させる提案をまとめ、報告書を作成する予定です。



レタスや菜の花を有機栽培している農家のビニールハウスにて

南会津町耻風担当「獨協大学地域活性化プロジェクト大竹チーム」の活動報告

代表 飯島竜太郎

南会津町^{ほしがき}耻風を担当する大竹チームは、飯島竜太郎(学生代表:経営学科3年)、山田雄大(副代表:国際環境経済学科3年)、中里美香(副代表:同2年)、高村ひとみ(同3年)、吉澤聖菜(同3年)、西家笑実香(同2年)、荒井真子(同1年)、小林風夏(同1年)、羽賀咲弥加(同1年)の9名からなるチームです。

大竹チームは、耻風の現状と魅力を確認し学生の視点で地域資源を発掘するために、11月18・19日に第1陣、12月9・10日に第2陣が現地調査を実施しました。第1陣、第2陣の2度の現地調査で地区の全18世帯のヒアリング調査を実施しました。第1陣は地域資源調査として蓮畑、蕎麦耕作地、リンゴ園、空き家を調査したり、山林や館岩川沿いの散策しながら土地利用調査を実施。また地域住民の方々と意見交流会も実施しました。第1陣の調査後、地域住民の力による「蔵カフェ」の運営、地区の自然を体験してもらおう林間学校プランの作成、蕎麦を使った特産品づくりなど提案内容の検討に入りました。

第2陣は裁ちそばと江戸流手打ち蕎麦のそば打ちを体験したり、第1陣で実施できなかった世帯へのヒアリング調査を実施。地区の散策を通して、高齢化によって桃やリンゴの果樹栽培が難しくなり、蕎麦畑に切り替わっている地区の現状が把握でき、キノコ栽培や山菜取りなど魅力的な地域資源に恵まれていることもわかりました。また第2陣では、第1陣後に検討をはじめている提案が実現可能か、住民との意見交換を行いました。

以上のような2度の現地調査によって、耻風の現状について把握することができ、地域住民の方々の地区の現状への不安に対する率直な思いを聞くことができました。また、それまで気付かなかったブランド蕎麦や会津の魅力を発見できました。今後は、地域の人々の暮らしに合った提案を練り上げて、次年度の事業実施を目指して、県主催の調査報告会に向けて準備を進めていきます。



耻風住民と意見交流会(第1陣)



耻風住民と意見交換会(第2陣)

学生と教職員のメンタルヘルス



経済学科教授 伊藤 晋二

私は本年4月に獨協大学に赴任してまいりました。経済学部経済学科に所属し、精神保健についての講義とゼミナールを担当しております。

私のもう一つの大きな活動の柱が保健センターの業務です。保健センターの役割は学生と教職員の皆様の健康を保持することをお手伝いさせていただくことにあります。

前任校では14年間教職に就き、精神医学・精神保健学の講義に加えて、在職期間の後半はやはり学生のメンタルヘルスのための業務に携わってまいりました。その経験から、学生と教職員のメンタルヘルスについて考えるところを述べさせていただきます。

まず大学生のメンタルヘルスですが、学年ごとに特色があります。1年時にはそれまでの高校生活では、ほぼ生活のすべてが校則や保護者の管理のもとで決められていた生活から、一人暮らしとなればなおさら自由であるものの自己決定と責任が伴うようになり、履修登録から自ら選択してやらなければならない慣れない環境に戸惑うことが多いようです。特に人間関係があまり得意ではない学生が仲間づくりに取り残され、アパートから出られなくなる、いわゆる「ひきこもり」になることさえあります。2年時・3年時には恋愛関係やゼミナール内での人間関係に悩む学生が多いように思います。ゼミナールの教員が学生の生活上の悩みの相談に乗ってくれることが多いのですが、学生のほうで教員との間に壁を感じてしまい、孤立してしまうことがあります。また、3年時の後半から就職活動が始まり、これが学生生活上の大きなストレスとなります。ここ数年は学生の売り手市場となっており、一見すると就職状況は良いのですが、それぞれの学生は自分の一生の問題であるので希望の職種に就こうとするのですが、実際には求人は職種により偏りがあり、人気のある企業はなかなか内定をもらえないのが実情です。ここでも人間関係が得意でない学生にとってはエントリーシートの作成から面接に至るまで大変苦痛に感じる人が多いし、応募した会社から選考に落ちたとの知らせを受けると、自分のすべてが否定された気持ちになり、ひどく落ち込みます。4年生になると前半はひたすら就職活動に明け暮れ、夏休みごろからは卒業論文のプレッシャーが加わります。大学に来

る日数も減る人が多くなり、友達と話す機会も減り、どうしてもストレスが溜まってきます。

学生の皆様にはぜひゼミの先生をはじめとして、大学のスタッフは学生の味方であることを忘れないでほしいと思います。恋愛や就職のことが親に相談しにくければ、カウンセリングセンターや保健センターに来てください。少しでも悩みが軽くなるようにお手伝いをします。

また大学職員の皆様は、大学のさまざまな行事や大学に関する制度の変更に際して、締め切りが決まっている業務を抱えることが多く、どうしても長時間労働になってしまいがちです。この業務が複数重なってくるとオーバーフローを起し、強いストレスとなって「うつ」の原因となることがあります。長時間時間外労働が発生した場合は面接をさせていただくこともあると思いますし、昨年度から始まった「ストレスチェック制度」で高ストレスと判定された方は、ぜひ産業医の面接をお申し出ください。ストレスチェック制度は基本的には皆様のセルフケアをお手伝いするものであり、プライバシーには配慮されていますので、どうぞご利用ください。

大学教員の皆様は、その多忙さの割にはメンタルヘルスが維持されている方が多いようです。これは業務が自由裁量制的要素が多いこと、研究などはご自分が好きな分野であることがストレスを感じにくい要因だと思います。ただ、身体的な疾患やアルコール量などのプライベートな問題がある方が時々いらっしゃいますので、大学の定期健康診断やストレスチェック制度への積極的な参加をお願いいたします。また、精神的に問題を抱えた学生への支援をお願いすることがこれから多くなると思いますので、ご協力のほどよろしく願いいたします。

獨協大学の印象としては、自由で活発、積極的であると強く感じます。就職予備校のような大学が増えている中で、ある意味で古風といえると思います。この獨協大学の良さを守りながら学生、教職員の皆様とともに成長していきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

民法と経済学



経済学科教授 湯川 益英

2017年度から、経済学部の一員になりました。

大学教員になってから30年近く、獨協大学に着任してからも10年あまりになりますが、これを機に、新たな気持ちで再スタートを切りたいと思っています。

よろしく願っています。

私の専攻は民法ですが、その中の財産法、とくに契約法の理論について、比較法的な手法を用いて考究しています。

その成果を、わが国の消費者法の分野に展開することで、法理論を法実践に反映することができればと望んでいます。

ここ10数年間は法科大学院で法曹育成に携わり、その前は主として法学部で教えてきましたが、経済学部での民法のゼミや講義に際して、経済学や経営学との関連も踏まえつつ、どのように授業を行えば良いのか、あれこれ愚考中です。

そこで、経済学部での民法の授業のあり方についての、現時点での私なりの考えを、商品交換における取引の安全と公平の要請をめぐって、皆さんにお示しして、新任の挨拶に代えたいと思います。

資本論によれば、「経済学は商品から、すなわち個人々のあいだ、あるいは原始共同体のあいだに生産物の交換が生まれたときからはじま」ります。

商品は、意思をもたない「物」ですから、自分で市場に行くことができませんし、自分自身で自分たちを交換し合うことはできません。ですから、これらの「物」を商品として相互に交換するためには、自分たちの意思をこれらの物に宿す「人」がいなければならないと説かれることになります。

この資本論における分析は、経済的な単位としての商品交換が、直接に法的関係の出発点となり得る関係であることを示唆していると思われま

す。それは、とりわけ、民法の中で、財産法=契約法に、資本主義私法

の基礎法としての、また商品交換法としての位置を与えるものです。

例えば、契約法において「物」とは権利の客体であり、「人」は権利の主体です。

そうして、安全な商品交換が行われるためには、物を交換しようとしている人どうしが、お互いに相手を物の私的所有者として認め合うことが重要になります。

民法の物権法における物権法定主義は、間接にこのことに資する思想です。不動産の所有者や賃貸人・賃借人を公示する登記制度は、直接に取引の安全のために機能します。

債権法において、売買をはじめ賃貸借・消費貸借、雇用・請負その他13個の典型的な契約が提示されているのもその一環です。

また、人が物を交換する際には、「自分たちの意思をこれらの物に宿す」行為、すなわち意思の表示が必要です。しかし、意思表示が誤解によってなされたり、だまされてしまったものであるときには、公平な取引は望めません。錯誤や詐欺による意思表示が無効となり取消しが可能になるのは、そうした事態を防ぐための民法上のルールです。

ところで、上記のようなテストを経て有効に成立した取引が、結果的に等価性を欠いていた場合、1000万円の価値があると思って購入した土地が、実際には500万円の価値しかなかったようなときには、商品交換の等価性を確保する要請が生じます。そのために民法は担保責任制度を用意しています。

約束が守られずに損害が生じた場合、例えば、売主の過失で、購入した家の引渡しが遅れたために、買主がやむを得ずアパートを借りなければならなくなったときには、そのアパートの賃借料は損害として、売主の買主に対する債務不履行責任としての賠償責任の対象になりま

す。このようなかたちで、商品交換をめぐる基礎的な問題から出発して、広く経済的営為と民法との関係を具体例に則して二重写しにすることができれば、学生諸君に民法と経済の密接不可分の関係を、さらに経済学と法学の面白さを伝えることができるのではないかと思います。試行錯誤を繰り返す日々です。

行動経済学に関する研究および教育



経済学科准教授 山森 哲雄

2017年4月に経済学部の准教授に着任した山森哲雄(やまもりてつお)です。どうぞよろしくお願いいたします。

私の専門はゲーム理論、実験経済学、そして行動経済学です。近年はとくに、人間の感情・認知・行動に関する特定の傾向を経済実験とアンケート調査によって同定することで、標準的な経済学やゲーム理論では説明できないさまざまな現象を解明することに関心があります。たとえば「貨幣錯覚」という現象があります。これは、人々が貨幣の実質的な価値を無視して額面額をもとに損得を評価することをいいます。多くの人にとって、物価が12%下落しているときに給与が50万円から5万円減るよりも、物価が12%上昇しているときに給与が50万円から5万円増えるほうが心理的な抵抗は少ないと思います。しかし、これがまさに貨幣錯覚なのです(実質賃金は前者で上昇、後者で減少しています)。私がこれまでに実施した実験は、貨幣錯覚が経験によって解消されない長期的な現象であり、その影響は時間とともに蓄積することを発見しました。今後は貨幣錯覚を矯正する方策などについて検討することが課題です。

本学でも昨年11月に経済実験を実施しました。本学で初めて開催されるフォーマルな経済実験ということで不安もありましたが、全日程を成功裏に終了することができました。この場をお借りしてご協力いただいた教職員の皆様によりお礼を申し上げます。今後も本学学生を対象とした経済実験を定期的実施する予定です。

講義は主にミクロ経済学と行動経済学を担当しています。教員になって今年で9年目になりますが、実は、行動経済学の授業をもつのは初めての経験です。これまで研究に取り組んできた分野の教育に、ようやく携わることができて大変うれしく思っています。

ここで、行動経済学の授業について簡単に紹介します。行動経

済学とは、人間の感情や認知に関する心理学的な知見を分析に取り入れた経済学の一分野です。標準的な経済学では完全合理的な人間を想定して分析が進められてきました。しかし、現実の人間はさまざまな情報によって歪んだ形で世界を認識することがありますし、判断や選択を間違えてあとで後悔することも少なくありません。その原因となる認知的な錯誤を認知バイアスといいますが(貨幣錯覚も認知バイアスの一種です)、行動経済学ではさまざまな認知バイアスの存在を前提として経済分析が行われます。

私が行動経済学を学生に教えるにあたって目標としているのは、学生が自らの判断や選択をさまざまな意思決定の場面で改善することができるようになるということです。そのために授業のなかで工夫していることが2つあります。まず、アンケートや実験など体験型の学習を積極的に取り入れていることです。このような体験型学習により、自分がどのような認知バイアスに陥る傾向があるのかを受講生に知ってもらうことができます。次に、標準的な経済学における意思決定理論、ゲーム理論、そして確率論の学習にも十分な時間を割り当てています。意思決定を改善するためには「正しい」判断や選択とは何かを知らなくてははいけません。そこで、人間の不合理性について学ぶだけでなく、合理的選択について教えてくれるこれらの学問を同時に学習することがとても大切なのです。

これまでの講義を振り返ってみると、日常の例をもとに人間の不合理性について紹介する行動経済学の「お話」を面白いと感じてくれる学生は多かったように思います。その一方で、数式を使った理論の学習にも力をいれたことから、授業内容が難しいと感じる学生も少なくなかったようです。

大学の授業には、そこにしかない学びがあり、そこでしか身につけることのできない力というものが 있습니다。「人間ってこんなにも不合理」という「お話」を知るだけでしたら一般向けの解説書やビジネス書を読めば十分です。行動経済学の知見を実際の選択に活かそうと思えば、抽象的な思考力の向上が必須であり、それには教員の指導のもとで辛抱強く理論を学んでいく必要があります。一人でも多くの学生に行動経済学の有用性を理解してもらえるように、私も全力で授業に臨みたいと思います。

**経済学実験
参加者募集!**

実験ではPCを用いて簡単な意思決定を行っていただきます。経済に関する予備知識はまったく必要ありません。

【開催日時・募集人数】

2017年11月17日(金)

① 12時35分～14時35分(先着22名)
② 15時35分～17時35分(先着22名)

2017年11月20日(月)

③ 12時35分～14時35分(先着22名)
④ 15時35分～17時35分(先着22名)

※ 上記①～④のうち二つ以上に参加することはできません。実験は、前週の実払いを食めて2週間程度で終了する予定です。

【応募資格】 本学学部生・院生

※ 実験説明は日本語で行われますので、日本語を理解できる方が対象となります。

【開催場所】 東棟 4階 E-408

現金報酬あり!
実験に参加していただいた方には、参加報酬(¥500)に加え、実験結果に応じた賞励金を現金でお支払いします。
※ 参加費からお金を回収することはありません。

事前登録不要!
開催時刻の15分前まで参加登録の受付を開始します。下記の受付場所に直接お越しください。

受付場所
(東棟4階 E-408前)

持ち物
学生証、印鑑
※ 報酬の支払いに必要です。必ず持参してください。

お問い合わせ先
経済学部
准教授 山森哲雄
tkm@econ.tus.ac.jp

教育・研究活動の過去と現在、そして将来



経営学科教授 周 劍龍

2001年4月に獨協大学に赴任してから、法学部(3年)、そして法科大学院(13年)に所属していた後に、2017年4月より経済学部経営学科に所属することになりました。経済学部において担当している講義科目は、会社法、法学、演習などです。法学部や法科大学院の場合と違って、経済学部では経済学や経営学を専門とする学生を対象にして会社法などの法律関連科目を教えるため、従来と違った講義の進め方が当然要求されることになります。以下では、これまで法学部や法科大学院での教育を通して得た経験を踏まえながら、経済学部で法学とりわけ会社法を教えることについて考えて、ならびに実践していることを中心に、またそれらに合わせてこれまで私自身が研究したことなどを簡単に述べることにします。

1、経済学部で会社法などを教えること

経済学部や商学部などのような学部において、必ずと言っていいほど会社法という専門科目がカリキュラム上設置されています。このことから明らかなように、会社法学と経済学や経営学とは密接な関係性を有するものと思われます。その理由としては、まず経済学や経営学が会社企業を直接研究対象としているのに対して、会社法学は会社企業を規制する会社法をその研究対象としています。経済学や経営学と会社法学とは、視点が異なるものの、いずれも会社企業を研究対象とする点において共通項を有するということができるからです。この点については、「会社の設立、組織、運営および管理については、他の法律に特別の定めがある場合を除くほか、この法律(会社法を指す、筆者注)の定めるところによる」という会社法1条に規定される会社法の趣旨から明らかにすることもできると思われます。ちなみに、会社法学の研究対象は、会社法に限らず、会社企業をめぐる利害関係者の利害を調整するルールの内容をも含めるとより広く解されています。

つぎに、会社法が経済の発展を導いていくことも当然ありますが、多くの場合においては法改正を通しての会社法の進歩が経済の発展に大きく依存しているからであります。たとえば、2005(平成17)年会社法制定の際に、企業の経済活動のグローバル化に伴って、自国企業の競争力を高めるために世界中の多くの国が相次いで会社法制の自由化を重要な内容とした会社法改正を成し遂げたことを受けて、日本会社法も、定款自治にかかわる規定を多く盛り込むなどのことによって会社法制の自由化を図っていました。そこで、上述のことを念頭に置いて、会社法と経済情勢や会社の経済活動との関

係性を学生に意識させるように、会社法の講義中に個々の制度の内容や用語について解説するに際して、制度生成の背景にあった経済情勢などを解説することを心がけています。また、新聞に掲載されている最新の経済情勢や企業に関する記事(たとえば、出光興産と昭和シェル石油との会社合併、製品の検査データ改ざんや不正経理などの企業不祥事等)を会社法的な視点から学生に解説しています。

法科大学院での講義の進め方に対して、双方向性やケース・メソッドが要求されています。法科大学院では、基本的にそうした要求に沿って講義を行っていました。それが可能となったのは、おそらく1クラスを受講生が比較的少なかったからであろうと考えられますが、いまの講義の進め方として、講義中に学生に質問したり、事例を検討したりして従来法科大学院で経験したことをできるだけ実施して、学生にとって分かりやすい講義を行えるように努めています。

会社法学がやはり法学という学問分野の一部分でありますので、会社法の講義は法学という分野の言説を用いて進められなければならないときには、受講生が法律科目全般について受講していないことをも考慮して、関連の法律用語や制度をも解説をしています。

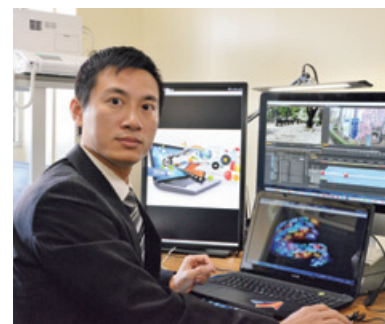
今後も、紆余曲折があると思いますが、模索しながら、経済学部に対応しい会社法を含めた法学関連科目の講義のあるべき姿を求めていきたいです。

2、これまでの、そしてこれからの研究活動

私は、いままでコーポレート・ガバナンス(Corporate Governance)に関する研究というテーマの下において、株主代表訴訟制度、親会社株主の保護などを中心に研究してきました。これからも研究の重点を引き続きコーポレート・ガバナンスに置きたいと考えています。コーポレート・ガバナンスに関する研究は、経済学や経営学の分野においても活発になされており、今後の研究において経済学や経営学の分野の研究成果をより一層活用したいと思います。従来の研究は、会社法に限らず、商法総則・商行為法、手形法・小切手法、金融法(金融商品取引法、銀行法など)にも及んでいます(詳細については、獨協大学HPに公開されている私の研究業績リストをご参照ください)。従来と同様に、今後も研究成果を教育活動の方に活用していくつもりです。

文系学生を対象としたメディア教育について

経営学科専任講師 李 凱



2017年4月に経済学部経営学科の専任講師として着任した李凱と申します。専門は教育工学で、特にeラーニングシステムの構築、マルチメディアコンテンツの開発を研究しています。これまで、他大学で8年間社会人を対象としたeラーニング教育に携わってきました。本学ではマルチメディア論、ウェブデザイン論、コンピューター入門を担当しています。

日頃の教育に対する工夫について、以下の点に留意して講義をするように心がけています。

1、実践力を持つ文系人材育成への工夫

21世紀はメディアの時代です。従来のTV放送、新聞のようなマスメディア、ソーシャルメディア、映像・CGなど複合的に融合しあつた新しいコンテンツ、メディア技術は社会に大きな変革をもたらしています。メディア教育では、ビデオ、コンピュータグラフィックスなどのメディア処理技術をもとにして、インターネット、アニメーション、ゲームのようなコンテンツの制作と最先端のメディア情報技術など様々な知識を学ぶ必要があります。講義中によく「私たちは文系」、「コンピュー

ターは難しい」などの意見がありますが、文系だからこそ工学系学生にない表現力と想像力を活かし、多様な社会的課題を解決できる成果を生み出せると思います。メディア教育はいくら言葉で説明しても実際にやってみないと分からないため、講義では文系学生の特徴を考慮しながら、単なるメディア分野の基礎知識だけではなく、問題発見、問題解決、応用技術に精通する実践的・創造的人材育成に挑戦しています。

2、グローバル社会に対応できる人材育成への工夫

日頃、受講する学生の意識改革も工夫しています。大学の学習とは、受身の姿勢で知識を得るものではなく、卒業後自分が社会に貢献する上で必要な知識を習得するために自発的に行うものであることを講義中に頻繁に説明し、講義で得られた知識が卒業後どういった分野で役立つのか、自分が社会で働く姿のイメージとのつながりを常に意識させるように心がけています。

また、「語学の獨協」の伝統ある本学の外国人教員として、グローバルな舞台上で活躍できる人材を育成するため、講義中に英語による板書、英語資料を配布するように配慮しています。また、プレゼンテーション力、コミュニケーション力を育成するため、講義前にITに関する最新ニュースの紹介、及びゼミの発表などを学生に順番に担当させています。

3、ICTの活用への工夫

私は長年教育工学に関する研究・教育を行っており、教育の質の向上、授業の効率化を目指しICTを活用しています。例えば、パソコンの画面上に手書きで板書し、知識の理解、注意力や集中力を促すよう心がけています。また、講義資料をインターネット上に公開し、講義前に予習を済ませた上で、教室でディスカッション、演習などを行うことによって、学生の学習意欲を向上させ、知識の定着を促すように心がけています。

最後に、本学に赴任できたことは幸運であったと思います。今後とも教育活動・研究活動を通して、本学の発展に寄与できればと思います。どうぞよろしくお願いたします。

「草食男子」はなぜ誤解されたのか 名付け親として語る



経営学科特任教授 深澤 真紀

もともと編集者で、メディアの黒衣仕事をしてきた私が、メディアの表に出る仕事や今のように大学で教える仕事になったきっかけは、2006年に「草食男子」を名付けたからだ。

この言葉は、2009年に流行語大賞トップテンをとり、「いまどきの若者は、草食男子で情けない」などとネガティブな意味で広まってしまったが、本来は若者をほめる意味でつけたので、当事者の若者には申し訳ないと思っているし、その誤解を解くためにメディアに出たり、大学で教えるようになったのだ。

草食男子と名付けたのは、今の若者は私たち上の世代と違って「もてないわけではないが、恋愛やセックスにががつしない男性」「家族や友人を大事にして、女性と友人関係がもてる男性」という意味だったのだ。仏教国の日本では、「草食」は精神性の高さにもつながる。「男子」も男の子ではなく男性という意味で、「精神性の高い男性が増えた」というつもりだったのだ。この言葉が反対の意味で流行してしまった背景には、女性誌から「女性がもてないのは草食男子のせい？」と書かれたことと、2008年のリーマンショックのあと「車が売れない」原因の「犯人」扱われて、経済界で大きく話題になってしまったためなのだ。

ではまず、今の若者は恋愛やセックスに興味がないのだろうか。「交際中の異性なし過去最多」というニュースが話題になるが、その元となっている厚労省の国立社会保障・人口問題研究所の「出生動向基本調査」で、若者が恋愛していたイメージの強いバブル期の1987年と2015年のデータを比べると、「婚約者がいる」2.9%→1.6%、「恋人として交際している異性がある」19.4%→19.7%と、ほとんど変わらない。ただその次に、「友人として交際している異性がある」という項目がある。かつて女性が交際を断るときの常套句が「お友達なら」というものだったため、1987年の若者は23.6%も「いる」と答えているが、そんな常套句を知らない2015年の若者からすると「友人として交際していたら、ただの友人じゃないか？」と5.8%しか「いる」と答えず、結果として「交際していない」が48.6%→69.8%と増えているだけで、調査項目が古くなっていることが問題なのだ。

つまり「少子化は草食男子のせいではない」のだ。諸外国を見ても、男性が積極的に見えるドイツやイタリアや韓国でも少子化がすすんでいる。日本やこれらの国の共通点は、家族に対する古い価値が残っていて、さらに若者の経済状況の悪化がある。フランスや北欧などの少子化が改善した国は、さまざまな家族の価値観を認め、若者に対して奨学金や雇用など、多様なチャンスを与えているのだ。

また、若者は消費に興味がないのだろうか。たしかに今の若者は自慢するための「見栄消費」はしない。そのかわり費用対効果のよい「コスパ消費」や、分かち合う「シェア消費」、趣味のための「オタク消費」には興味がある。そもそも若者に物が売れない一番の理由は少子高齢化によって、若者人口が少なくなったからだ。

「若者は内向きで海外に興味がない」というニュースもあるが、これもアメリカに留学する若者が減っただけで、さまざまな国に留学している。リーマンショック後には留學生の数はたしかに減っているが、それでもバブル時代よりはずっと多い。つまり全体の問題は、「若者の〇〇離れ」ではなく、「お金の若者離れ」なのだ。ほかにも若者の犯罪率や交通事故率は減り続けているなど、よいニュースが多いのだが、なぜか若者に関してはネガティブなニュースが流れがちである。

たしかに若者とはどんな時代でも評判が悪いもので、団塊世代やバブル世代もそうだった。しかしその世代は経済状況の後押しがあつて、社会に居場所を与えられたのに、今の若者にはそのチャンスが少ないのに、私たち上の世代は、若者を「情けない」と否定してしまいがちなのだ。

学生の皆さんに伝えたいのは、「自分の頭で考え、自分の言葉で話す」のではなく、まず「他人の頭と言葉をたくさん知って、そこから選ぼう」ということだ。そしていろいろな考え方や生き方を知り(政治、思想、宗教、性的指向、家族観)、他者を尊重し、自分の尊厳を大事にすることだ。それが大学という場ではできるのである。

地理学とカント哲学について



国際環境経済学科准教授 大竹 伸郎

現在、私は地理学と経済地理学そして地域調査法の講義を担当しています。地理学を学ぶ者の一人として、カント研究の泰斗である天野貞祐先生が初代校長を務められた獨協大学に奉職できたことは、大変名誉なことであるとともに学生に対して十分な知的満足度を与えることができたのかと自問するとまだまだ課題が多い1年であったと思います。

さて、天野先生が研究されていた哲学者イマヌエル・カントについては、広く皆さんに知られていることと思いますが、その哲学者カントがその思想を実現するために地理教育を重視していたことについては、あまり知られていないのではないのでしょうか。

天野先生が掲げられた獨協大学の建学理念は、「大学は学問を通じての人間形成の場である」というものです。この言葉が示すようにカント哲学を研究されていた天野先生は、人間形成が最も重要であると考えておられたのだと思います。1770年、カントは46歳の時にケーニヒスベルク大学から哲学教授として招聘されましたが、地理学の講義は1965年から始められ、引退まで約40年に渡り続けられました。これはカントの理想が、世界市民的な人間形成であり、地理学がその教育に役立つものであると考えていたためだとおもわれます。カントは教育について「教育の計画の構想は世界市民的でなければならない」という言葉を残しています。

また、カントの思想は「国際連盟の成立」など国際化社会を形成する上で大きな支えとなったと評価されていますが、現代社会はカントが理想としたものとは異なり、多くの矛盾を抱えています。1982年に発行された鶴見良行氏の著書『バナナと日本人—フィリピン農園と食卓のあいだ』は、発行から30年近くたちますが、現在でも多くの人々に読まれています。それはグローバル経済が抱える問題点が解決されておらず、今なお深刻な問題となっているからではないのでしょうか。現在の日本では、甘くて大ぶりの高級バナナが人気で、テレビCMでもよく見かけます。しかし、このバナナについて味や値段以外に関心を持っている人々はどれくらいいるのでしょうか。

バナナのラベルをよく見ると、これら的高级バナナにはある共通点があることがわかります。それはこれらのバナナが、標高500m以上といった高原地域で栽培されていることです。このことはどんな意味を持っているのでしょうか。海岸線付近の低地ではなく、標高の高い場所でバナナを栽培すると夜の呼吸作用が抑制され、糖度の高いバ

ナナが出来ます。しかし、高原地域で農薬を使用するとその被害が農園だけにとどまらず、雨とともに麓の村々や川に流れ込み海にまで及ぶのです。実際に現地では、農薬散布によると思われる皮膚炎や眼病が多発しており、生産する日本企業への訴訟も行われています。私たちの何気ない消費行動が、知らず知らずに、どこかの誰かの生活や健康を蝕む行為に加担することになってしまいます。それがグローバル社会の怖さであると思います。

地理学は、人と自然の関係性について学ぶ学問です。我々はよく文化という言葉の口にしませんが、その意味をよく理解している人はあまり多くないように感じます。例えば、日本の農村地域では昔からイナゴを食べます。虫を食べるといって気持ち悪いという意見が多いのですが、実際に自分がやらないだけで、毎回肉を食べるために自分で家畜を殺し、血まみれになっている姿を想像すれば、どちらが気持ち悪いかは明白でしょう。今の世の中は、分業制ですからすべてを自分が行う必要はありませんが、私たちが肉を食べるために、どこかの誰かが嫌な思いをしているのは確かなことでしょう。また、虫を食べるといってもすべての虫を食べるわけでも、そのまま食べるわけでもありません。最もおいしく食べられるよう調理して食べるのです。試行錯誤を繰り返しながら編み出され、地域社会に暮らす人々にも広く認知された上に、代々子孫へと受け継がれている調理法、それが食文化というものです。

ですから文化とはその風土(土壌や自然環境)に根差して発達した人間活動の結晶といえるものです。食べのものだけでなく、住居も服装も、宗教も、学術も、工芸も、祭りも、音楽も、踊りも、冠婚葬祭の儀礼に至るまで、それらを育む風土と密接に関係しているのが文化なのです。こうした多様性の意味を理解せず、単に自分が慣れていないだけで他国や自国の文化を拒絶したり、野蛮な行為であると決めつけるのはとても残念なことだと思います。もしも、まだ自国や異国の文化に関心を持ってない人がいたら、ぜひ地理学の講義を受講してください。少しだけでもいいかもしれませんが、きっと、前よりも世界について関心が持てるようになると思います。

教務課 経済学部系の窓口から

教務課経済学部係 高木 久美子



経済学部生の皆さん、こんにちは。2017年5月より教務課経済学部係の担当となりました高木久美子と申します。よろしくお願ひいたします。

私は、2017年3月に本学国際教養学部言語文化学科を卒業いたしました。在学中は、日本語教育を専攻し、外国の方へどのように日本語を教えるか、実際に模擬授業を行うなどしながら教授法を学んでいました。学業以外では、学科の学生スタッフや軽音楽サークルの活動、飲食店でのアルバイトや地域の日本語ボランティア活動に参加するなど、様々な分野の活動に取り組んでいました。大学生活では、学生のうちにしかできない多くの経験ができ、非常に充実した時間を過ごすことができました。興味を持ったことに対し積極的に挑戦したことで、自分自身の視野が広がり、非常に大きな財産になったと今改めて感じています。

大学生活では、自由に使える時間が多く、様々な人と関わる機会も多くあります。少しでも興味があるものを見つけたら、是非、積極的に挑戦してみてください。新しい物事に取り組む時には、最初は勇気が必要かもしれませんが、「やってみたい!」という気持ちがあれば、出来ないことはないと思います。限られた時間を有効に使い、多くの経験をさせていただけたらと思います。

大学生活を通じて感じた本学の良さは、「学びたい学生のための環境が整っている」ということです。蔵書数の多い図書館や、パソコンが使用できる自習教室だけでなく、2017年2月にはアクティブラーニングスペースが設置されるなど、現在多くの学内施設があります。そして、学習用途に合わせてそれらの施設を使い分けることが可能です。是非、学内の施設を存分に活用し、皆さんの学習や活動に役立ててほしいと思います。

さて、社会人になったばかりの私ではありますが、これまでの経験を通して、日々意識していることから、皆さんにお勧めしたいことがひ

とつあります。皆さんの今後の生活に、少しでもお役に立つことができれば幸いです。

皆さんにお勧めしたいこと、それは、「自分で考えるクセをつける」ということです。大学生活では、何を専攻するか、何を経験するか、そして将来何がしたいのかなど、自分で物事を選択する機会が非常に多くあります。そして、選択した物事に取り組む中で、上手くいかないことや、疑問に思うことに出会うことがきっとあると思います。そんな時には、どう対処すべきか、一度立ち止まって考えてみてください。物事の目的を考え直し、そのための解決方法を自分で考えることで、多角的な方向から物事を捉えることができるようになると思います。そして、その能力が様々な場面で役立つのではないかと思います。もちろん、考えた上で1人では答えを出せないことも数多くあると思います。そんな時は、1人で抱え込まず、周りにいる友人や先生方、職員に是非相談してみてください。

私も現在、業務を通して、自分で考えるということを常に意識しています。すぐに聞くべき時もあると思いますが、一度自分の考えを整理した上で、周りの先輩方や同僚に相談すると、異なる視点からの意見を聞くことができます。1人では解決できなくても、まずは考えてみるという行動が、自分自身の成長に繋がっていくと考えています。まだまだ「自分で考えるクセをつける」努力をしている最中ですが、今後皆さんと一緒に成長していけたらと思います。

最後に、皆さんが在学中の経験を生かし、今後社会で活躍していただけたら大変嬉しく思います。自分のために、今しかできないことに是非挑戦してください。そして、周りの友人や先生方との繋がりを大切にしてください。皆さんが有意義な学生生活を送れるよう、職員一同、精一杯サポートさせていただきたいと思ひます。質問やご意見等ございましたら、気軽に窓口にお越しください。改めましてどうぞよろしくお願ひいたします。

ネットワーク経済編集委員長 有吉 秀樹

「先生は常に最先端のものを追いかけていなければならないから大変ですね」・・・マーケティングを生業としている私に対して、しばしば浴びせられる台詞である。ヒット商品、アイデアなどマーケティングの持つキラキラしたイメージがそのような台詞を想起させるのかもしれない。しかし、次世代を牽引する製品・サービスにつながるヒントは、表面的な時代の先端ではなく、むしろ、至極ありふれた日常の営みの奥底にこそ隠れている。個人の人生も同様であろう。確かに、本誌のインタビュー企画で登場された方々は素晴らしい治績をあげられた。だが、私たちが学ぶべきはその治績の陰で、彼ら彼女らが「何に悩み」「どう考え」「どう動いた」のかではなかるうか。学び舎を巣立った学生が、いつの日か社会というフィールドで向い風に吹き付けられ、岐れ道に迷った時、本誌が行く先を照らす一筋の光となることを期待したい。

Network 経済 2018 Vol.33・34

年2回発行予定 ©獨協大学経済学部

編集・発行 獨協大学経済学部ネットワーク経済編集委員会
〒340-0042 埼玉県草加市学園町1丁目1

編集部 TEL 048(946)1929 FAX 048(943)3153
E-mail deaneco@stf.dokkyo.ac.jp

企画デザイン・印刷 望月印刷株式会社

※本誌の内容を許可なく転載・放送することを禁じます。 2018年3月31日

Published by Faculty of Economics, Dokkyo University and Society of Dokkyo Economics
Supported by Mochizuki Printing Co.,Ltd.